



”美ら島沖縄”

風景づくりのためのガイドライン

新しい風景づくりへの挑戦
「現代の沖縄風」

「『美ら島沖繩』風景づくり検討会」

平成17年3月に、各専門家よりなる

「『美ら島沖繩』風景づくり検討会」を設置し、3回の検討会と、個々の課題について議論し内容を深める意見交換会を6回開催し、この度、本書を取りまとめるに至った。

名簿

(五十音順・敬称略)

○は座長

作家

荒俣 宏

照明

(株)石井幹子デザイン事務所代表取締役
石井 幹子

○ 景観・都市計画

琉球大学工学部環境建設工学科教授
池田 孝之

観光

名城大学大学院客員教授
岩佐 吉郎

エコツーリズム

(有)資源デザイン研究所代表取締役
海津 ゆりえ

農業農村振興

沖縄県土地改良事業団体連合会部長
来間 玄次

観光産業

(財)沖縄観光コンベンションビューロー常務理事
洲 謙 孝

琉球史

琉球大学法文学部国際言語文化学学科教授
高良 倉吉

景観設計

東京大学工学部社会基盤学科助教授
中井 祐

経済界

沖縄県経済団体幹事会議長
仲里 全輝

都市デザイン

(株)都市科学政策研究所代表取締役
備瀬 ヒロ子

住環境
歴史的景観

京都府立大学人間環境学部助教授
宗田 好史



発刊にあたって

琉球大学工学部環境建設工学科教授 池田孝之

景観法が制定され、この沖縄でもその実践をめぐっての議論が始まった。もともと景観条例は、いくつかの市で積極的に取り組まれていたが、国法をバックに新たな手段を加えての可能性はこれからである。その状況のもとで、沖縄における景観施策のあり方とガイドラインを示そうとするのが本書である。

景観形成という用語ではなく「風景づくり」としているのは、沖縄の自然、歴史、文化、コミュニティを幅広く捉えるために相応しい概念と考えたからである。また、従来の景観マニュアルではなく、各自治体の景観行政担当者の教科書として役に立つべく使える内容を目指した。もちろん、広く、行政関係者、企業、専門家、一般市民等にもわかり易く表現を工夫してある。

景観をめぐる議論は尽きない。理念は理念に終わり堂々巡りをする場合が多い。また、技術的な報告書等は一部の関係者の机の中に眠ってしまったている。ここでは、沖縄の風景づくりに関わる裏づけ資料を充実させ、理念を明確にし、それを実現するための具体的な戦略イメージを盛り込んでいる。

今後、「風景づくり」の実践へ向けて、多くの方々の手引きとなれば幸いである。

最後に、検討・作成に当たって、熱い思いを持って議論に加わり、また深いこたわりで作成に努めてくれた関係者・担当者に謝意を表したい。そして、今後の継続的な実践への成果を期待します。

平成十九年一月

”美ら島沖繩”

風景づくりのためのガイドライン

01	総論「現代の沖繩風」を目指して.....	01
	01-01 沖繩らしい風景づくりの視点.....	05
	① 一括りにできない「沖繩らしさ」.....	07
	② 無秩序に使われてきた「沖繩らしさ」の表現と 「地域らしさ」が反映されない沖繩の風景.....	09
	③ 沖繩らしく美しい風景と 新たにつくられてきた沖繩の風景.....	11
	④ 地域の一貫した取組みと、 調和のとれた風景が主役であることの認識.....	13
	01-02 沖繩の風景づくりの基本.....	15
	① 沖繩の「自然風景」.....	17
	② 沖繩の「伝統的風景」.....	23
	③ 沖繩の「人とくらしの風景」.....	29
02	「沖繩らしい風景」の個性と多面性.....	37
	02-01 沖繩の「自然風景」.....	39
	① 変化に富んだ沖繩の自然風景.....	41
	② 多種多様な自然素材.....	49
	③ 沖繩の自然と人々の関わり.....	55
	02-02 沖繩の「伝統的風景」.....	61
	① 沖繩の伝統的風景を振り返る.....	63
	② 沖繩の伝統的風景を今に伝える素材や工法.....	71
	③ 沖繩の伝統・文化と人々の関わり.....	77
	02-03 沖繩の「人とくらしの風景」.....	83
	① 沖繩の現代風景を振り返る.....	85
	② 新しい素材や工法.....	93
	③ 現代の沖繩文化と人々の関わり.....	99
03	「現代の沖繩風」実現に向けて.....	107
	03-01 沖繩を訪れる人達が魅力を感じる風景づくり.....	109
	① 観光リゾート.....	109
	② アーバンリゾート.....	115
	③ ウォーターフロント.....	121
	④ 夜景の演出.....	127
	03-02 生き生きとしたくらしの中の風景づくり.....	133
	① マチぢゅくい(都市).....	133
	② シマぢゅくい(集落・地域).....	139



第一章

総論「現代の沖縄風」を
目指して

総論 「現代の沖縄風」を目指して

沖縄は、先の大戦により、生活や産業の基盤施設や沖縄ならではの構造物であるグスク、石橋や琉球庭園等の歴史的蓄積は破壊され、日常の場にあった原風景は大きく失われてしまった。戦後の沖縄は、このような荒廃の中から、本土復帰を経て、自立的発展を目指し生活・産業基盤の整備等の様々な地域振興策が進められ、地域の経済面・生活面で一定の成果が上げられてきた。しかしながら、この経済的発展は、かつて沖縄が有していた「沖縄らしい風景」を取り戻してきたとは、必ずしもいえないのではないだろうか。このような認識の下、今後沖縄が真の発展を目指すに当たっては、「**沖縄らしさ**」を今一度検証し、**これを実現するための「風景づくりの方向性」**を探り、魅力ある地域づくりを進めていくこととしたい。

○「風景」とは、地域の「顔」

風景とは、人々の日常の活動範囲で視覚等を通して主観的にとらえる印象に加え、それぞれの地域における人々の暮らしや歴史文化的背景、また自然環境等を含めた、**地域の人々の生き様を総合的に表現するもの**としてとらえたい。

まず、この風景という文字の持つそのものの意味、成り立ちについて考えることとする。「**風**」とは、元来方位の神様の下にいる、地域の特徴、固有の文化等を他の地域に伝える神であることから、「**地域の趣や雰囲気**」を表すものと考えられる。また、「**景**」とは 柱の影で時間や季節を計ることであり、自然環境や生活環境の中での人々の「**活動のあり様**」、つまり「**暮らし方の指針**」を示すものである。このことから、「**風景**」とは、単なる景観、景色にとどまらず、**日々変化する自然環境、生活スタイル(暮らし方)と調和のとれた、その地域の特**

性や趣を示すものであり、また、弛まぬ努力により作り上げられる地域固有の生活の記憶であり、そこに住む人々の「アイデンティティ」つまり地域の「顔」と考えられる。

このような風景は、地域の関係者が連携なく無造作に個性を示す場合、地域の顔とはなれない。風景とは、地域に住む人々によるいわば共同の作品であり、住民は個性を発揮しつつ連携して「絵」になる地域をつくり上げていかなければならない。

○「沖縄らしさ」とは

沖縄は、全国でも際立った地域特性を有している。「自然環境面」では、亜熱帯・海洋性気候の下、年間を通じて温暖で、貴重な動植物が生息し、海岸には珊瑚礁に囲まれた白い砂浜が広がり、青い空と美しい海は人々を魅了している。また、琉球王朝以来、東アジア諸国との交易交流から形づくられた沖縄の「歴史的・伝統的イメージ」は、我が国において、他の地域にはない、固有の文化的資源であることから、このような文化的情報を国内、海外に発信できる、質の高い貴重な観光資源ともなっている。沖縄における現実の風景は、このような沖縄の地域特性や地域イメージを基本としつつ、人々の生活・経済活動により、日々「新しい風景」につくり変えられている。この過程で、沖縄らしさが実現されているかどうかが課題である。我々が検討を進めている「沖縄らしさ」とは、沖縄の各地域において、これまで時間をかけて「自然と人間の活動」が相まってつくり上げられてきた、地域における生活の姿そのものであり、また今後我々が生活を営む中で努力してつくり上げるべきものでもある。つまり「沖縄らしさ」とは、沖縄の各地域でつくり上げられる「生活の趣」を尊重し「沖縄風」を目指す過程で、実現されるものである。

○沖縄風の要素

「沖縄風」の重要な要素の中で注目すべきものは、「光」ではないだろうか。沖縄における太陽の光は、本土の光とは明らかに異なり、眩しい程にまちの色彩を際立たせている。この光は、海洋性の気候における「暑くても涼しい風」と相まって、「沖縄風」を五感で認識することができる。また、夜になれば、郊外では、昼の明るさとは対比的に満天の星空が地上を照らす。しかしながら、まち中では、夜半までの活発な経済活動が、昼の明るさとは全く異なる、無秩序な明かりをつくり出していることから、「沖縄らしい夜の明かりづくり」が必要となってくるであろう。新たな風景をつくりだす上においても「沖縄の光」を最大限に生かす努力が求められる。

なお、この「沖縄風」にも、沖縄の各地域、本島と離島など当然一括りにできるものではない。それぞれの地域ごとに、「やんばる風」、「宮古風」、「石垣風」等とも表現できる、それぞれ各地域の「風」があるはずである。**このような各地の「風」を掘り起こし、確認していくことが求められ、この風の集積が「沖縄風」となる。**

○「現代の沖縄風」を求める

沖縄の各地域における「らしさ」を生かし、またつくり上げるような、新しい風景づくりに資する地域づくりを進めるに当たって、住民等関係者の協力協働を容易にするには、「共有できる目的・目標」また**「明確な言葉・イメージ」を提示する必要がある。**このキーワードとして、**「現代の沖縄風」**を提示したい。

我々の求める「沖縄らしさ」は、時代と生活環境とともに変化する。地域における構造物は、新たな風景を形づくる重要な要素である。特に構造物の形と外観の素材と色合いは、風景に大きく影響を与える。構造物の素材や色合いは、本来、その地域で入手される資源からつくられてきた。つまり、各地域においては、そこで採れる鉱物や植物により建材や塗料を使用したことによる統一性のある風景がつくられてきた。しかし、各地域が、急速な近代化の中

で、効率的画一的に整備が進められることによつて、地域の「らしさ」が失われつつもある。

「沖縄らしさ」を示す風景を取り戻すには、近代的土木建築技術を活用しても、住民等の関係者が協力協働して、地域の持つべき**共通のイメージの下に、各地域における「風」を実現する継続的な努力**をすることが求められる。

また、共通のイメージを形成していくには、まず、住民、観光客等の幅広い視点から総合的に検討する必要がある。さらに、風景は時々刻々変化する。生活パターンの二十四時間全体にわたつて昼だけでなく夜間における風景も検討の視野に入れるべきものである。このように地域ごとに、構造物の形、デザイン、色合い等で**統一的な「イメージ」を持つことが、地域の風を示すことに繋がることとなる**。例えば、色合いが違つても、共通のイメージをもつて、色調、彩度、明度等を統一させることが一つの有効な手段ともなる。

また、このイメージは、過去の伝統的沖縄風を超えた、新たな沖縄風であり、今後我々が目指すべき沖縄風であり、その時点における沖縄風であることから、「現代の沖縄風」と定義したい。この**「イメージ」を地域ごとに検討する中で、その共通認識の下につくり上げられる新しい沖縄らしさが新たな沖縄風としての「現代の沖縄風」である**。

○「風」から「風格」へ

「風景づくり」には、そこに住む人々がその地域固有の自然環境や文化的な特性を自ら確認し、それを生かす弛まぬ努力が不可欠である。また、この作業には、住民のみならず関係する行政機関やそこで経済活動を行う人々、その地域以外の人々との協働作業が求められる。また、「現代の沖縄風」を実現するには、「関係者の個性」と「地域の個性」をいかに同時に実現するかも課題となるが、その解決手法は各地域ベースでの十分な話し合い以外には方法はない。

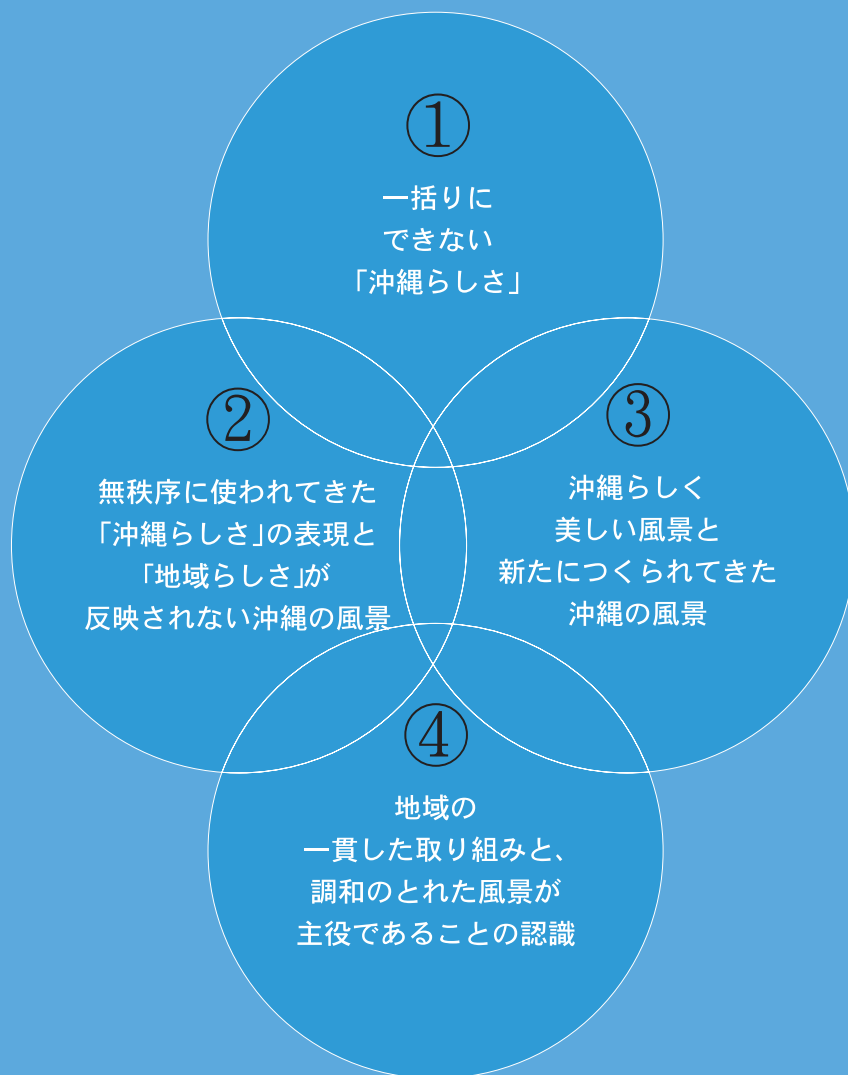
21世紀の沖縄において、各地域の**「風」がその地域に根付き、「風格」となるまでの不断の努力・協働を実践し、「現代の沖縄風」を実現していくことが、「美ら島沖縄」風景づくりに当たつての基本的な理念である**。

沖縄らしい

風景づくり

の視点

沖縄らしい
風景づくりを
進めるにあたり、
踏まえるべき
基本的な視点として
左記の4つの視点を
とりあげる。



沖縄らしい

風景づくり

の視点 ①

一括りにできな「沖縄らしさ」

沖縄らしさについては、本島における各地域、各離島において自然環境や住環境、生活文化の違いからそれぞれ独特の個性を持っている。

ここでは、沖縄らしさをもたらす風景を、

- ・自然風景、
- ・伝統的風景、
- ・人とくらしの風景、

の3つの要素から考える。

自然風景

本島北部は、通称「やんばる」と称される地域で、山地や森林が多く、岬や入り江など海岸線の表情も豊かである。



(国頭村)

伝統的風景

金城町は、琉球王府時代に武家屋敷が点在していたところで、今でも美しい石畳、石垣が残っている。



(那覇市首里金城町)

人とくらしの風景

近代化されたビル群とモノレールなどのインフラ整備がなされた那覇の都市空間。



(那覇市モノレール)

集落形態は、蔡温がとった風水政策の影響を多く受けている(名護市屋部の風水図)



(名護市屋部の風水図)

住民や観光客など誰にとつての風景づくりをするのか、どの時点の風景を基本として風景づくりを行うのか、また数ある風景要素の中からどの風景要素を尊重し、活用していくのか、それぞれ個々のケースにおいて考える必要がある。



(宮古島市)

珊瑚礁に囲まれた沖縄の美しく豊かな海



(南風原町)

本島南部は平坦な台地状で、農地の開発が進んだ田園風景を形成している



(那覇市上間)

赤瓦屋根は、明治維新後一般にも使用が許され、本格的に普及した。戦前の沖縄の一般的な住宅景観となっていた



(竹富町)

年間を通して咲き誇る花々や濃い緑、海や空の色などの自然の彩りは沖縄らしさをイメージづける。強い目差しに映える赤瓦の色は、「酸化焼成」という焼き方で赤色になっている



(那覇市)

コンクリート家屋の陸屋根は、戦後アメリカ文化の導入とともに急激に増加し、台風に強いこともあって戦後の沖縄の一般的な住宅景観となっている



(那覇市平和通り周辺)

那覇市における観光客や地元買物客で賑わう昔ながらのマチクワイ

沖縄らしい

風景づくり

の視点 ②

無秩序に使われてきた「沖縄らしさ」の表現と、
「地域らしさ」が反映されない沖縄の風景

これまで、多様な沖縄らしさの表現が、あらゆるところで使われてきたが、もともとある「地域らしさ」が十分に活かされていない場合もある。

それは、「地域らしさ」に対する認識や議論が不十分なまま、風景づくりを進めてきた結果ともいえる。





「地域らしさ」とは、その地域の気候、風土や歴史、生活文化が反映され醸成されるもので、その地域に住む人々の自覚と再発見を通じて意識されるものである。



バス停の上屋の屋根にまで使われている赤瓦

(金武町屋嘉)



国道332号の中央分離帯にも使われている琉球石灰岩

(那覇市)



地域の伝統家屋で統一された住宅景観

(竹富町竹富島)

沖縄らしい

風景づくり

の視点 ③

沖縄らしく美しく風景と 新たに つくられてきた沖縄の風景

沖縄をとりまく自然環境、歴史・文化は、様々な個性を有しており、誰もが感じる沖縄らしい美しさを持っている。

しかしながら、現在の沖縄の風景は戦禍によってその多くが消失した後、新たにつくられたものが多く、その風景は戦前のも



(那覇市首里金城町)

沖縄の美しい歴史・文化的な風景

このため、「沖縄らしい風景」をとらえる時は、自然や歴史の中で時間をかけてつくられてきた美しく貴重な風景について評価するとともに、戦後復興の中で新たに作りられてきた沖縄の風景についての評価も考える必要がある。

のとは大きく異なっている。



(那覇市の市街地県庁付近) 那覇市久茂地

県都・那覇は、戦後60年を経て、現在までに目覚ましい発展を遂げてきた。都市景観では、建築物群の意匠や色彩の不調和、屋外広告物の規制などが課題として挙げられる



(名護市部瀬名)

地域特性と周辺環境に調和したりゾーン景観



(北谷町美浜)

近年若者や観光客の注目を集める北谷町のアメリカンヴィレッジ。商業地の風景として個性的なものになっている

沖縄らしい

風景づくり

の視点

4

地域の一貫した取組みと、 調和のとれた風景が主役であることの認識

「沖縄らしい風景」は、地域の「自然風景」、「伝統的風景」と「人とくらしの風景」の調和した姿であり、地域の一貫した取組みが求められる。

調和のとれた風景が主役であることを十分認識し、個々の施設などにおける誇張された意匠や奇抜な形態を避ける必要がある。





灯台のデザインにおいて、石垣港の玄関口にふさわしいシンボリックなものをという観点から左図のようなデザインが提案された。しかし、石垣港全体の景観マスタープランにおいて、構造物は目立たないものとする方針や、周辺の自然とカラーの調和について議論があり、通常のシンプルな灯台デザインで進めることとなった。



(北谷町国道58号)

沿道に様々なデザインや色彩の看板が乱立しており景観を阻害している。



通常のサンエーの看板



(那覇市おもろまち)

沖縄県屋外広告物条例及び那覇市サインデザインマニュアルに基づき、周辺環境に配慮されたサイン計画の事例、今後は看板の位置、大きさ等についても配慮の必要がある。

沖縄の

風景づくり

の基本

沖縄の「自然風景」

「伝統的風景」

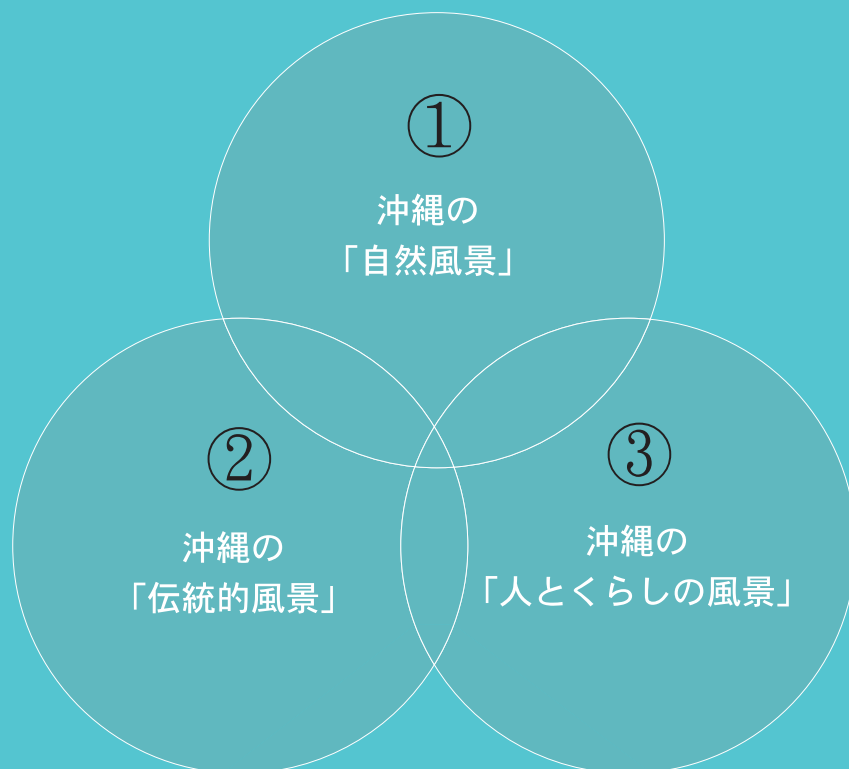
「人とくらしの風景」は、

沖縄らしい風景の原点であり、

その風景を尊重し、保全し、

調和を図っていくことが、

沖縄の風景づくりの基本である。





沖縄の「自然風景」

01-02
沖縄の
風景づくり
の基本
①



自然が育んできた沖縄の風景

沖縄の「自然風景」は、日本の他地域とは異なる沖縄独自の資源である。

多様な

自然

沖縄の「自然風景」は、亜熱帯の独特な気候のもと、眩しい日差しと暑さ、豊かな海と潮の流れ、島嶼とうしょとしての個性ある地形、そしてその気候や海流、地形が育む多様な生態系が形成され、さとうきび畑などの田園風景とあいまって、沖縄らしい眺望を創出している。

沖縄の「自然風景」は、同じ沖縄にあっても、本島、宮古、八重山、その他島嶼において、異なる地形や樹林、作物などによって、それぞれ異なる自然風景をなしている。



海、空の青さとさとうきび、防潮林が見事なコントラストを演出している(石垣市)



パイナップルの黄緑がゆるやかな斜面一帯に列を描いている(東村)

恵みの風景 おそ 畏れの風景

沖縄の、1日の時間のうつろいの中で、また、季節の変化において、それぞれに自然の恵みを受けた美しい風景を映し出す。

一方、沖縄の自然は時に激しく荒れて災いをもたらす自然ともなることから、沖縄の人々の自然への畏れのおそ、気持ちや備えの形が自然風景の中にしっかりと組み込まれている。



初夏の青空に映えるデイゴの花が夏の訪れを知らせてくれる



抱護林が冬の厳しい北風から集落を守っている(渡名喜村)

沖縄の自然風景を活かす 風景づくりの基本

自然の災いへの備えと生活の利便性を確保しつつ、
それぞれの地域や場所に応じて、

また1日の時間のうつろいや季節に応じて異なる

沖縄の「自然風景」を尊重し、

多様な生態系を育む自然との

調和のとれた沖縄らしい風景をつくる。



緩やかな起伏やカーブなどの微地形を活かした道路線形が沿道の自然風景を際立たせている(本部町)



本島北部の自然海岸の風景(名護市部瀬名)

沖縄の「伝統的風景」

の基本 2

風景づくり

沖縄の

01-02



歴史・文化が培つちかってきた沖繩の風景

沖繩の「伝統的風景」には、琉球王朝の時代に中国との交易交流がもたらした風水の思想が宿り、中国・日本の双方からの土木技術・建築技術が影響している。また、伝統を伝え続ける地域のまつりや行事は地域の人々の絆の強さを感じさせる、沖繩らしい風景である。

稀少な風景

沖繩の「伝統的風景」は戦禍により多くが消失し、残っている風景は稀少な財産であった。

さらに、機能性や利便性などのニーズから、現代的な建築物への移行が急速度で展開した。

残された稀少な伝統的風景さえも「地域らしさ」として住民が自覚していない場合をはじめ、様々な要因により残したくても残せない場合がある。



本島では少なくなったフクギの屋敷林がかたちづくる並木道(本部町備瀬)



石積み、石畳には、その時代の沖繩の歴史・文化を反映した形態・構築技術がみられる(南城市玉城前川)

現代にも 生きる風景

水道のない時代、湧水を生活用水や農業用水として利用してきたおり、カー（井泉）は今も地域住民の心の拠り所となっている。

地域の石材を活用した石垣、生命力のつよい樹木を活用した防潮林や屋敷林、これらは、人々が厳しい自然に対して、培ってきたくらしの知恵がつくる風景となっている。



地域住民の心の拠り所でもあるカー（南城市玉城垣花）



台風などの強い海風から家屋を守る防潮林（宮古島市）



サンゴ石など地域で採れる石材を活用した石垣（竹富町）

沖繩の 伝統的空間を活かす 風景づくりの基本

地域の「伝統的風景」として、その価値を地域の住民が認識するとともに、地域と行政が一体となって沖繩らしい風景を保全していく。

現代の住環境・生活様式との乖離かいりに対しては

「伝統的風景」を活かすための方法を検討する。

地域の「伝統的風景」と調和したデザインにより

沖繩らしい風景をつくるために、地域の「伝統的風景」の歴史・文化的背景、技術的意図を踏まえたデザインの質に留意する。



馬場跡が公園、広場などとして整備されることによって、伝統的空間が保全・継承されている(南城市玉城垣花)



地域住民が屋敷林、石畳道などの歴史・文化的資源と共生することで、沖縄らしい風景が保全されている(久米島町西銘)

沖縄の「人とくらしの風景」

風景づくり
の基本 ③

沖縄の

01-02



厳しい自然と歴史に対峙し、 人々が培つちかってきたたくらしの風景

広大な海に囲まれた沖縄、台風などの強い風や大波、亜熱帯特有の高湿、多雨の自然環境に対峙し、人々はさまざまなくらしの知恵を出し、沖縄らしい風景をつくってきた。戦火による焦土から立ち上がり、米軍統治の時代を超えて、沖縄の人々は生き生きとしたたくらしの営みの中から個性的な風景をつくり出してきている。

亜熱帯特有の

環境と共生する

くらしの知恵

常襲する台風による、強い風と大きな波、コンクリート素材は人々の命とくらしを守る新しい風景づくりを牽引してきた。

日差しが強烈で、蒸し暑い沖縄の生活に対して、沖縄の家屋やビルには、熱射をやわらげ風通しをよくする工夫が見られ、地域の自然と共生したくらしの風景となっている。



開放的でかつ陰の演出を多用した名護市庁舎(名護市)



壁面緑化により熱射をやわらげている(那覇市)



風通しがよい沖縄の伝統的家屋

生き生き とした 営みの風景

沖縄地域では、日々の暮らしの中に、エイサーや豊年祭・海神祭などの祭事が息づいている。

一方、亜熱帯の農産物が並び、市場には、独特な沖縄風土の元に、生き生きとしたくらしの風景が見られる。



海辺における祭りの風景(糸満市)



牧志第一公設市場(那覇市)

沖繩の

人とくらしの風景を活かす 風景づくりの基本

厳しい自然と歴史に対して、人々が命とくらしを守るために培ってきた、さまざまなくらしの知恵が、戦後の新しい風景にもさまざまなくらしの工夫として見られる。

沖繩の自然環境の特徴から、様々な新旧のくらしの知恵を結集することが、沖繩らしい風景を創造する基本となる。

地域の人々が主体となって、地域らしさを追求し、地域住民や企業、行政の協働により地域らしさにあふれた風景を創造する。



地域らしさを守り育てるため、地域主体によるまちづくりワークショップ



地域主体でつくったまちづくりルールによりできたコミュニティ道路
(那覇市久米)

”美ら島沖縄”

風景づくりのためのガイドライン

01	総論「現代の沖縄風」を目指して.....	01
	01-01 沖縄らしい風景づくりの視点.....	05
	① 一括りにできない「沖縄らしさ」.....	07
	② 無秩序に使われてきた「沖縄らしさ」の表現と「地域らしさ」が反映されない沖縄の風景.....	09
	③ 沖縄らしく美しい風景と新たに作られてきた沖縄の風景.....	11
	④ 地域の一貫した取組みと、調和のとれた風景が主役であることへの認識.....	13
	01-02 沖縄の風景づくりの基本.....	15
	① 沖縄の「自然風景」.....	17
	② 沖縄の「伝統的風景」.....	23
	③ 沖縄の「人とくらしの風景」.....	29
02	「沖縄らしい風景」の個性と多面性.....	37
	02-01 沖縄の「自然風景」.....	39
	① 変化に富んだ沖縄の自然風景.....	41
	② 多種多様な自然素材.....	49
	③ 沖縄の自然と人々の関わり.....	55
	02-02 沖縄の「伝統的風景」.....	61
	① 沖縄の伝統的風景を振り返る.....	63
	② 沖縄の伝統的風景を今に伝える素材や工法.....	71
	③ 沖縄の伝統・文化と人々の関わり.....	77
	02-03 沖縄の「人とくらしの風景」.....	83
	① 沖縄の現代風景を振り返る.....	85
	② 新しい素材や工法.....	93
	③ 現代の沖縄文化と人々の関わり.....	99
03	「現代の沖縄風」実現に向けて.....	107
	03-01 沖縄を訪れる人達が魅力を感じる風景づくり.....	109
	① 観光リゾート.....	109
	② アーバンリゾート.....	115
	③ ウォーターフロント.....	121
	④ 夜景の演出.....	127
	03-02 生き生きとしたくらしの中の風景づくり.....	133
	① マチぢゅくい(都市).....	133
	② シマぢゅくい(集落・地域).....	139

第二章

「沖縄らしい風景」の 個性と多面性

「沖縄らしい風景」の個性と多面性

前章では、「沖縄らしい風景」は、一括りに捉えられるものではなく、個性的な特徴とともに地域の自然や歴史・文化、時代の変遷を背景とした多面性を持っていることを示し、今後の取り組みのあり方を述べるとともに、「自然風景」、「伝統的風景」、「人とからしの風景」が、「沖縄らしい風景」の原点であり、「風景づくりの基本」であることを述べた。

この章ではこの3つの要素がもつ、個性と多面性を再認識するために、「自然風景」、「伝統的風景」、「人とからしの風景」のそれぞれについて、整理する。

なお、「自然風景」、「伝統的風景」、「人とからしの風景」の3つの要素は、それぞれが独立したのではなく、厳しくも豊かな「自然」、そして独特な「歴史・文化」が「人とからし」に反映され、地域によって、それぞれの個性をもった「沖縄らしい風景」として受け継がれてきたものである。

したがって、それぞれの要素は、それぞれが風景の主体として成立している場合もあれば、それぞれが相互に重なり合って風景として成立している場合もある。

1 沖縄の自然風景

① 変化に富んだ沖縄の自然風景

② 多種多様な自然素材

③ 沖縄の自然と人々の関わり

2

沖縄の伝統的風景

- ① 沖縄の伝統的風景を振り返る
- ② 沖縄の伝統的風景を今に伝える素材や工法
- ③ 沖縄の伝統・文化と人々の関わり

3

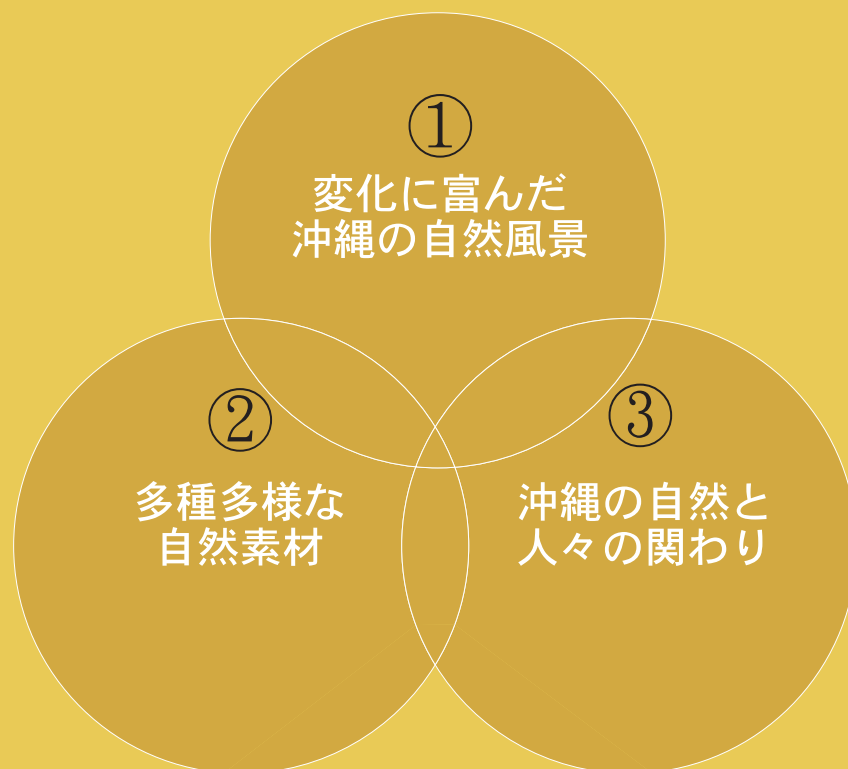
沖縄の人とくらしの風景

- ① 沖縄の現代風景を振り返る
- ② 新しい素材や工法
- ③ 現代の沖縄文化と人々の関わり

沖縄の

「自然風景」

「沖縄らしい風景」を構成する要素は、大部分が自然の要素がつくる風景でありそこには、亜熱帯性気候の強い日射しが織り成す風景や地域ごとに地形、植物などにも特徴ある沖縄の自然風景が見られる。ここではつぎのような項目で沖縄の自然風景を整理した。



02-01 沖縄の自然風景

1

変化に富んだ 沖縄の 自然風景



太陽と空

昼と夜

1日の時間の
うつろい

サンライズとサンセットは、沖縄有数の魅力ある風景である。また、強い日差しに対して、西表諸島においては、「はいむるぶし」と呼ばれる南十字星が見られ、各地域での1日のうつろいは異なる。



月夜

光と影

光と影の
強いコントラスト

沖縄の強い日差しは、海の青や丘の緑などの色彩が際立つとともに、大きな木や民家のひさしなどに照りつける日差しが濃く深い影をつくりだし、光と影の強いコントラストを創出している。

沖縄の季節

沖縄の季節感

夏のすごしやすさ:6月末以降の暑期は、最高気温が本土と比べて高くなく、風もあるのでじっとりした暑さではない。

梅雨とスコール:梅雨は本土より約1ヶ月早い。8月にはスコールも多く、年間降水量は約2000mmで雨量も比較的多い。(全国平均約1700mm)

台風銀座:台風の発生数は、年間平均26.7個であり、そのうち、7.0個が沖縄に接近している。

冬の季節風:季節風が強く、曇りや霧雨の日が多い。(気温、台風の統計期間1971年-2000年)

項目	那覇	宮古	石垣
平均気温	22.7	23.3	24.0
最高気温(7月)	31.3	31.4	31.8
最低気温(1月)	14.3	15.6	16.1

海と島

美しい海

海の色が変化するイノー

イノー:「イノー」は、波が静かであり、陽の光に色を変化させて沿岸域の表情を豊かにし、美しい海の風景を創出している。
サンゴ礁:島を美しくふちどるサンゴ礁は、イノーやリーフを形成する造礁サンゴであり、世界的に見ても造礁サンゴの多い海域である。



石灰岩の侵食による海岸地形(恩納村)



リーフで囲まれた島(南城市コマカ島)



遠くまで続く緑と白い砂浜(伊平屋島)

白い砂浜とハンタ

砂浜、海崖、岬、断崖:島の海岸線は、サンゴの破片からなる「白い砂浜」の海岸線と、琉球石灰岩の隆起・侵食により形成された「海崖」、突出した「岬」や断崖(ハンタ)からなる凹凸のある海岸線など、島ごとに多様な海岸地形を見せている。

海岸線



ハンタ地形(読谷村残波岬)

高島(こうとう)と低島(ていとう)

沖縄県の島数は160余りあり、その内、有人離島数は40余りある。沖縄の島々の地形は、数百万年に及ぶ大規模な地殻変動により隆起・沈降を繰り返し、標高が高い「高島」と低く平らな「低島」を形成した。

高島



シンボリックな山頂の形(石垣市)



三角錐の形状の典型的な円錐カルスト(本部町)



小起伏山地と河川(竹富町西表島)



高島とはいえ比較的ゆるやかな山並み(宜野座村)

高島タイプは、本島北部、久米島、石垣島、西表島

沖縄の山地は、低山性の小起伏山地からなり、最も高い山で於茂登岳の526m(石垣島)、本島でも与那覇岳の503mである。これらの山が連なる稜線や、山裾に広がる丘陵の斜面を覆う緑は、青い空に柔らかな緑のスカイラインを形成し、緑豊かでやさしい自然風景を印象づけているまた、本島北部の円錐カルストと呼ばれる円錐形をした山は、その特徴的な形態が地域を代表する風景となっているものが多い。

●高島と低島の分類

島の分類	島の成因	地形				地質	土壌	水分系
		山地	丘陵	台地	低地			
高島	大陸性島 火山島	有り	大起伏 丘陵	砂礫 段丘	谷底低地	古期岩類 火山岩	赤黄色土 (酸性土)	河川系
低島	サンゴ礁 (大陸性島)	無し	小起伏 丘陵	石灰岩 段丘	海岸低地	琉球 石灰岩	石灰岩土 (中・アルカリ性土)	地下水系

(出典:沖縄の島じまめぐって 増補版)

- 高島 (本島北部、伊平屋島・渡名喜島・慶良間諸島、久米島、石垣島・西表島・小浜島・与那国島・尖閣諸島)
- 低島 (本島中南部、粟国島・宮古島・伊良部島・下地島、南、北大東島、伊是名島、竹富島・黒島・新城島・鳩間島・波照間島)

ていとう
低島



緩やかな地形に沿った道路(宮古島市伊良部島)



石灰岩堤の緑地と畑(南城市)



丘陵地にあるさとうきび畑(南城市)



なだらかな丘陵地(竹富町波照間島)

低島タイプは、本島中南部、宮古島、黒島、波照間島

本島南部は、標高200mの低平な地形であり、宮古島でも最高が100mあまりの低平な地形である。本島南部や宮古島では、幾重にも平地部を横切る緑の稜線は特徴的な風景を形成している。南北大東島においては、環礁が隆起し、島中央部が盆地状になり、盆地の周りを屏風のように連なる小高い丘が取り囲む独特の風景が形成されている。

森と川

やんばるの森(本島本部)



濃く深い緑

沖縄の広葉樹の種類は、石灰岩の有無で異なる

沖縄の植物の多くは常緑樹で、風に強い低く横にのびる独特な樹形や厚い葉をもつものが多い。また、高温多雨であるため、樹木の成長速度は非常に速い。常緑広葉樹林は、石灰岩地域と非石灰岩地域(砂岩、粘板岩など)に大別でき、石灰岩地域は、ガジュマル、アカギ、ヤブニッケイなど多くの種によって構成される。非石灰岩地域では、高木層では、イタジイが大半を占めている。



日差しに映える葉と安定感のある樹形

マングローブ林

水辺のマングローブ

淡水と海水が交じり合う河口や内湾に生育するマングローブは、熱帯や亜熱帯地域に特有な植生であり、西表島の仲間川を最大として、県内で10箇所ほど存在している。マングローブは、沖縄の亜熱帯らしさを特徴付ける植物群落である。



仲間川(竹富町西表島)



マングローブ
(石垣市)

緑に縁取られた 水域・水辺・湾



アダンの海浜植生(竹富町鳩間島)



溪流(本島北部)

溪流、湿地帯

沖縄の島々の川は短く、すぐに海に至る。本島北部や石垣島、西表島など山間部では水の豊かな溪流も見られるが、深い山の中にあるため、目にする機会は少ない。一方、平地部では緩やかな勾配の穏やかな河川風景となり、河口域にはマングローブの他、干潟や湿地が広がる場所もある。

石灰岩段丘台地上の緑と水

「石灰岩堤」の帯状緑地と湧泉が織りなす風景

石灰岩段丘台地上では水の浸透性が高いことから、河川は発達せず、雨水は石灰岩を浸食し洞窟・鍾乳洞を形成、地下水脈となって、段丘断層の割れ目に湧泉が豊富に点在する。こうした沖縄本島中南部に見られる緑と水の風景は、「石灰岩堤」の帯状緑地と地下水系をもち、本島北部の森と川とは異なった自然景観を呈する。



石灰岩の断層の割れ目からしみだした地下水(南城市)



垣花樋川周辺の「石灰岩堤」の緑(南城市)

02-01 沖縄の自然風景 2

多種多様な 自然素材





表情のある岩

むき出しになった琉球石灰岩
(糸満市喜屋武岬)

石灰岩

産地によって性質が異なる石灰岩

沖縄の1/3は石灰岩の地質からなる。その大半は宮古島や沖縄本島中南部等に占める琉球石灰岩で、数万年前のサンゴ礁の堆積物からなり、比較的新しく柔らかで小さい孔が沢山開いている。その他、古生代から中生代として本部石灰岩と宮良石灰岩が知られているが、年代が古いいため孔も少なく固い。このため、本島南部にある首里城では、入手しやすかった琉球石灰岩を加工し擁壁(石垣)を築いた。一方、本島北部の今帰仁城等では、本部石灰岩の加工が困難なため自然石の形をそのまま使用した。



石灰岩は、昔から貴重な資材の一つであった(那覇市首里城)

砂岩

石彫刻や碑文に使用されている砂岩

砂岩は、多くの地域で見られる。特に固い砂岩は、加工研磨して石材として利用されてきた。用途は、碑文のほか、首里城復元においては石彫刻として、高欄、大龍柱、小龍柱にも使用されている。

土壌の一種としての砂岩は「ニービ」と呼ばれ、本島中南部と一部周辺島嶼に小面積ずつ分布し、よく知られている地域として、豊見城海軍壕の構築されている丘陵がある。ニービは一般に保水性が悪く、干ばつの被害を受けやすい。



緑を育む土



(南城市知念)

ジャーガル

中南部に多い「ジャーガル」

「ジャーガル」は、「クチャ」が風化したアルカリ性重粘土土壌である。クチャとは、沖縄地方で島尻層泥岩のことで、岩というより固結粘土としての見方もある。島尻層泥岩が広く露出する南部の地形は、なだらかに波打つような丘陵であり、泥岩の乾湿風化、地すべりが作用して次第に谷幅を広げてきたと言われる。



島尻マージ (糸満市)



国頭マージ (今帰仁村)

マージ

「島尻マージ」と「国頭マージ」

赤から黄色の土壌で、沖縄本島南部、伊江島、宮古島などに分布する「島尻マージ」と本島北部、久米島、石垣島などに分布する「国頭マージ」に区分される。島尻マージは、弱酸性～弱アルカリ性でほとんど農地に利用されている。国頭マージは強酸性で、林地や農地に多く利用されている。

多様な植物

沖縄を代表する花、
ハイビスカス



デイゴ

色鮮やかな草木

ハイビスカス、デイゴ、ブーゲンビレア

亜熱帯の風土に育つ草花は、ハイビスカス、デイゴ、ブーゲンビレアなど、彩度の高い原色に近い花や赤みを帯びた花など、鮮烈な色彩にあふれている。

ハイビスカス：各島、中国が原産である。古くから生垣として使用され、葉は解熱剤、花は気管支炎など、薬用の効果がある。

ブーゲンビレア：ブラジル原産で生垣などに用いられる。周年開花し、花の最盛期は、11から3月である。

デイゴ：インド原産であり並木や公園で用いられる。沖縄では、デイゴの良く咲く年は台風が多いと言われている。



ブーゲンビレア

なかゆくい

沖縄でよく飲まれる「さんぴん茶(ジャスミン・ティー)」。ジャスミンのふるさとはインドである。沖縄には琉球王朝時代に中国との交易で福建省から伝来した。「おもろそうし」ではジャスミンをモヘクワノハナ、首里方言ではムイクワと呼ぶ。中国ではジャスミンで香をつけたお茶を香片(シャンピエン)茶という、沖縄の「さんぴん茶」はこれが語源らしい。ジャスミンの香りは素晴らしい。沖縄では戦前頃まで、庭に咲いたジャスミンの花を朝摘んで、お茶に入れ香りを楽しむ習慣があったそうだ。現在、那覇市寄宮地区の住民たちが、街路樹にジャスミンを導入し香りによる風景づくりに取り組んでいる。

植生

沖縄は常緑広葉樹林

沖縄の農作物: さとうきびによって代表され、さとうきびは多くの場所で見られる。パイナップルは国頭マージに代表される酸性土壤に限って栽培されている。

海岸林: アダンの他、オオハマボウなど、石垣島や西表島などでは、テリハボク、ハテルマギリ、サキシマハマボウなどが多く生育している。マングローブ: 沖縄に6種類生育している。沖縄本島付近は4種類であるが、八重山群島ではすべての種類が分布している。

石灰岩地域の常緑広葉樹林: リュウキュウハナイカダ、オオバギ、ヤブニッケイ、アカギなど多くの種類が挙げられる。中南部の石灰岩地域に見られるガジュマル、ハマイヌビワなどの森林は戦後発達した。

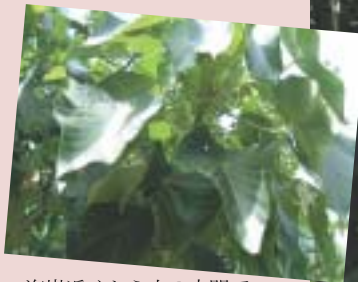
非石灰岩地域の常緑広葉樹林: 主にイタジイが優先する森林である。特に、本島北部、石垣島の於茂登岳一帯や西表島でよく発達している。リュウキュウマツ: 琉球列島に広く分布し、地質を選ばないこと、利用価値も高いことから、県内では古くから植林されている。

砂浜ではよく見られるアダダン



緑豊かなパイン畑 (東村)

丸く光沢のある葉が特徴のテリハボク



海岸近くから山の間でよく見られる地味なおオハギ



学校、墓、拝所などでよくみかけるアカギ (那覇市首里)



葉の香りがよいヤブニッケイ (クスノキ科)



見栄えがよく、古くから植えられてきたリュウキュウマツ (今帰仁村)

名護のガジュマル (名護市) (通称ヒンプンガジュマル)



02-01 沖縄の自然風景

3

沖縄の 自然と 人々の 関わり



自然の「恵み」

農地

生産する大地の風景

自然環境は島にくらす人々の生命を支える基盤である。大地をうるおす水と強い日差しに恵まれて、植物は生命の糧となる実りをもたらした。

本土では厳寒の季節に、沖縄では一面にさとうきびの銀色の穂がゆれる。酸性の特に強い赤色の土壌では、パイナップルが斜面一帯に列を描く。年中緑色が失われることのない放牧場、高い評価を受けている花卉や熱帯フルーツ畑など、沖縄の農地の表情は個性的で多彩である。



サトウキビ畑



パイナップル畑(東村)

海の畑

季節とりどりの海からの恵み

島を取り囲む広大な海の幸が、年間を通じて、沖縄の食を多彩に彩る。なかでも日々の糧を身近に提供してくれるイノーを、海辺での生活者は親しみを込めて「海の畑」と呼ぶ。

春浅い季節のアーサー採り、次いでモズク採り、たった一日の豊漁であるスナイ採りは季節の風物詩であり、収穫は塩づけや乾燥加工され一年中食卓を飾る。一方、新鮮な魚貝は、その日の糧を得るという範囲で収穫を制御し、イノーの生態との共生が維持されてきた。

日光で色を変化させる澄んだイノーは、生きている海の畑。赤土で赤茶色に濁ったイノーを、地域の人々は血の色に例え、イノーが病んでいることを悲しむ。



モズク養殖(本部町)

自然への「畏れ」



風を防ぐフクギ並木(久米島町真謝)

防風林、防潮林

島々の緑のエッジ

沖縄の自然は時に荒れて、島の緑を茶色に一変させ、家を壊し、人の生命さえも容赦なく奪う。日々の暮らしを通じて、人々は自然に「畏れ」を感じ、その厳しさと向き合って生きることの中で、沖縄独特の生活空間の構造が生み出されてきたといえる。

人々が特におそれたこと、それは津波や高潮の襲来や台風時の暴風である。こうした波の害や風の害、潮の害に対処する知恵のひとつが、海岸線をぐるりと巡る防風・防潮林帯であり、緑のエッジが、特異な風景をみせる。

集落抱護林

風水思想に基づいた抱護林

「抱護」とは、特定の場所を風水害から保護する施設(森林、地形)をさす歴史的な用語であり、機能的な側面から見ると防風林の一種であり、森林法に指定されている風・水害の防備林に相当する。

今日の防風林と異なる点は、それが風水思想に基づく地形的な概念を含んでいるところにある。「山気が漏れないように諸山が相囲んでいる(杣山法式帳(そまやまほうしぎちょう))」状態や造林地を保護する林帯をも抱護と呼ぶ。

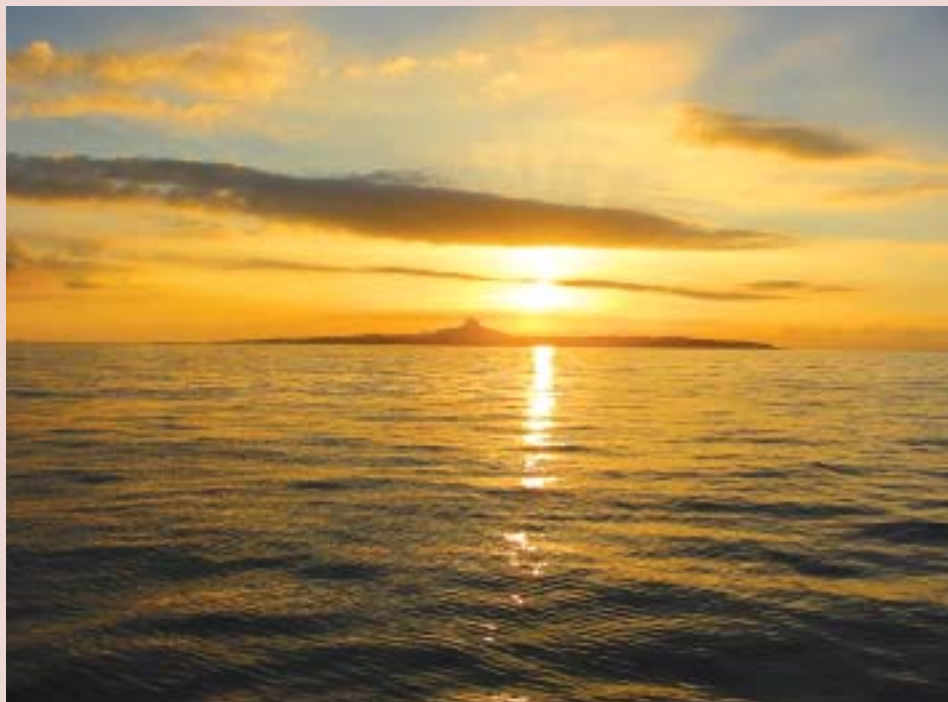
総じて、集落抱護林は集落の水源を涵養しつつ、冬の厳しい北風に対処して集落全体の居住環境を向上させる機能が大きい。



集落抱護林(本部町備瀬)



集落抱護林(渡名喜村)



信仰の対象とされた伊江島タッチュー(本部半島からみる伊江島への眺望)

ニライ・カナイ

海のかなたへの思い

自然は、島にくらす人々にとって絶対の存在である。生命の水も、生命の糧も、島外との往来も、その一切を自然がコントロールした。人々は万能の自然神を敬い畏れ、海のかなたに「ニライ・カナイ」という神世界があると信じた。

「おもろさうし」などの祭祀歌謡集の中では、東方の海のかなたとの固定的な考えが示されているが、実は海の底という観念もあるほど、各地域で「ニライ・カナイ」の所在方向には違いがある。遠く神世界から人間世界を訪れて、島々村々に豊饒や文物をもたらしてくれる「ニライ・カナイ神」への信仰とともに、海そのものが島にくらす人々にとって特別の存在であり続ける。



信仰の対象とされた久高島(斎場御嶽から見る久高島)



世界遺産に登録されている南城市の斎場御嶽、琉球王朝最高位の御嶽であった(南城市)

御嶽(うたき)

森(ムイ)・グスク・ウガン・オンなど聖地の総称

森には、セジ(霊力)が憑りつくものとされ、古来祭祀の対象になった。このような聖域として御嶽があり、宮古ではスク、八重山でオンと呼ぶ。

御嶽全般をみると、御嶽は実に多彩な神々の聖地として、今日の沖縄各地域に息づいている。村を愛護する祖霊神、島立神、島守神、ニライ・カナイの神、航海守護の神などに関係する聖域が御嶽と総称されていることによる。

ほとんどの村々にみられるのが村を愛護する祖霊神の御嶽で、その多くが村の背後地の森に立地しており、村の宗家(根屋)と接するところにあって、現在も地域の祭事行事の中心としての象徴的空間となっている。

02-02

沖縄の

「伝統的風景」

長く独特な歴史・文化の
変遷を通して

沖縄の伝統的風景は培われ、
現在に引き継がれてきた。

それぞれの時代で風景が
形成された背景を踏まえながら、
沖縄の伝統的風景を整理する。



02-02 沖縄の伝統的風景

1

沖縄の 伝統的風景を 振り返る

守禮之邦





神が沖繩をつくる

【創世神話の地】
各地に残る神話伝承

沖繩には、世のおこりの神話伝承が各地に伝わる。その一つ、天からの神アマミキヨとシネリキヨがつくったとされる、辺土のアスマイ(岩山の名前)、今帰仁のカナヒヤブ、知念杜など、また、海から渡来した祖神アマミキヨが住んだ跡とされるミントングスクや浜比嘉島の洞窟など、神話の地は今日も聖域とされている。

【洞穴(ガマ)】
住まいとした
自然洞穴

仲泊遺跡(恩納村)のような岩陰、または各地にある自然洞穴(ガマ)がそのまま住まいとなっていた。時代を経て、竪穴式の穴屋などが作られるようになる。今日も深い茂みの奥の岩陰やガマの空間は神秘的な風景をつくっている。



仲泊の遺跡(恩納村仲泊)



王統のあけぼの

【集落の形成】
神のグスク

集落としての社会が発展し、その後、集落を支配した按司(あじ・領主)が、グスクを築造するようになる。琉球列島には、200から300近くのグスク跡がある。グスクの性格は、聖域説、集落説、防御としての城説がある。一般に小高い丘の上に形成され、城壁や石垣を有するものが多く、地域ごとの象徴的な空間となっている。

知念杜グスクは、「おもろさうし」に、『ちゑねんもりぐすく、あまみきよが、のだてはぢめの、くすく』とあるように初期のグスクであり、初期のグスクはその特徴として野面積みの石垣がかつての聖域の姿をとどめている。



知念グスク(南城市)

なかい
ゆ

海岸遺跡
(港川人)

港川遺跡より発掘された約1万8000年前のものと推定される人骨。1967年に八重瀬町(旧具志頭村港川)の石材採掘場で発見された。人骨から、筋肉が良く発達しており、身長は男性で154cm、女性で144cmぐらいと推定され、現代の沖繩人より低身であったらしい。



中山の浦添グスク(浦添市)

【三山時代のグスク】
強力な按司の出現
で3つの勢力に

三山時代の中心にあったグスクは、今帰仁グスク(北山)、浦添グスク(中山)、島尻大里グスク(南山)であり、威容を誇るグスクであったことを現在に伝えている。14世紀ごろに始まった三山時代は、尚巴志(しようはし)が中山王を破り、その後、北山、南山を滅ぼし、1429年に三山統一されるまで続いた。



北山の今帰仁グスク(今帰仁村)



南山の大里グスク(南城市)



沖縄の風景
の原点

【王城の地首里】
琉球王国の首都

第一尚氏王統が確立し、まず首里城や龍潭の整備がなされ、やがて第二尚氏王統の尚真・尚清王の代に王城内外の整備が一段と進められ、16世紀半ばには王国の首都の姿が整った。

今は、復元された首里城周辺の歓会門、久慶門、継世門、玉陵、園比屋武御嶽(そのひゃんうたき)、守礼門などをはじめ、首里金城町の大アカギ、石垣道、カーなど、琉球の王城と城下町のたたずまい全体に沖縄の伝統的風景の原点を見ることが出来る。



首里城城下、県立博物館蔵

【番所(ばんじょ)】
宿次の駅として整備された番所

王府時代、間切(まぎり：現在の市町村区画にほぼ相当)の行政拠点となった役所は番所と呼ばれる。もともと首里王府の宿次の駅として整備された番所はほとんど残っていない。近年になって、喜名番所が復元されるなど、伝統的風景の復元に取り組まれた。

近世琉球（1609年以降）になると、風景面では、農村の風景が変貌し始める。また、蔡温による様々な林政行政は、風水思想を抛り所に、沖縄の伝統的な集落や、沿道の風景の創出に大きな影響を与えた。



喜名番所(読谷村喜名)

【宿道の整備】 番所を結ぶ宿道

琉球王国時代には間切(まぎり)・シマ(沖縄独自の行政区画単位で間切は市町村、シマは字に相当する)制度があり、

各間切番所(役場)を結ぶ街道が整備され、これを宿道と呼び、首里城から各方面に放射状に伸びていた。

王都首里から、那覇港南岸に通じる真玉道(まだまみち)は、宿道以前の16世紀半ばに整備された公道であり、今にその形をわずかにとどめている。



宿道(赤線)と
国道58号(恩納村)

への聖域巡拝は、門中の催しとして引き継がれている。

【聖域】 御嶽(うたき)

御嶽は、琉球王府によって名称が与えられたと言われる。「琉球国由来記」の中には、御嶽数は、首里29、島尻297、中頭210、国頭143、宮古29、八重山76の記録がある。王府の政治の中で、特に重要な聖域とされたのが斎場御嶽(せいふあーうたき)である。東御廻い(あがりうまーい)と呼ばれる斎場御嶽



斎場御嶽(南城市)

【琉球経済の要としての港】 海上輸送として使 われた山原船

三山時代にはじまった中国への進貢は、やがて大きな交易へと発展していく。

那覇港や泊港は、経済の拠点として発展し、対中国貿易に使用された進貢船や、薩摩への年貢の運搬などに使用された楷船、更に各離島を結ぶ馬艦船などが往来していた。

北部と南部(町方)の輸送

においては、もっぱら海上交通が重要であった。北の恩納間切(仲泊へなかとまり)、前兼久(まえがねく)の港など、名護(名護港など)、今帰仁(運天港など)、国頭間切(鏡地港など)などの各間切の港と、南部の泊・那覇港、与那原港との間で、山原船と呼ばれる小型船により物資の輸送が頻繁に行われた。各地の港にはかつての風景を彷彿させるところもある。



19世紀前半ごろの首里城から那覇港の風景を描いた琉球貿易図屏風

なか
ゆくい

スポールディング 航海記

(1853年)より

緑したたる街並み、見晴らしのよい丘、こんもりと繁る木立、どれをあげても首里の都は世界一美しい。士官たちは首里に登るといつも無情の喜びにひたる。手入れの行き届いた泉で喉の乾きを癒し、雲つく大樹の陰でピクニック気分。その気になれば昼寝だつて楽しめる。昼のうたた寝が終わると鬱蒼たる樹木に囲まれた泉で水浴びを楽しむ。ここがアメリカならいったいどれだけの価値があるやら見当もつかぬ。あの伝統の国イギリスでさえ、こんな古色蒼然たる自然の庭園は持ち合わせていないのだ。

なか
ゆくい

ペリー提督遠征記の 第2巻

(1854年ジェイムズ・モロー評)より

那覇の港に船が入ると、そこには美しい景色が展開される。海岸から山の頂上までゆるやかに登る斜面の全てが完璧なまでに田園化され、冬の作物が緑の濃淡の影を与え、一様に広がる段々畑の山々と所々に忘れられたかのように点在するこんもりとした大木の樹木が田園風景に命を与え、美しい森を形成している。水平に延びる遠方の山々の頂上には裸の幹の上に優しく枝を伸ばした琉球ならではの松の木が生い茂り、その松の枝葉から陽射しがこぼれている。これら全てがこの世で最も豊かな田園風景を創り上げているのだ。



ペリー提督一行首里城より帰還の図(1853年)

上記は、ペリー提督が浦賀湾に来航し日本へ開国を促す前に琉球に立ち寄り記録した航海記の一部である。沖縄の伝統的風景がどの様なものだったか、往時を偲ぶことが出来る。



上/戦前の県庁舎(那覇市)
下/戦後建て替えた庁舎(那覇市)



風 景 代 化
の 近 代 化

【鉄筋コンクリート造】
コンクリート建造物の登場

廃藩置県により、沖縄県が誕生し、政治経済の中心は、首里から那覇に移った。明治政府の近代化政策により、風景に大きな変化が起こった。鉄公共建築は、大正年間に、鉄

軽便鉄道(那覇市)



【鉄道の敷設】
沖縄にも
鉄道があった

筋コンクリート構造が導入され、台風や白蟻対策として多く採用された。洋風でモダンな建物の一つであった大宜味村役場旧庁舎は今も残る。

沖縄では、沖縄県鉄道があり、762mmの軌間を採用した軽便鉄道であったことから、「ケービン」と通称されていた。路線は、与那原線(那覇・与那原間9・4

キロ)、嘉手納線(古波蔵・嘉手納間22・4キロ)、糸満線(國場・糸満間15・0キロ)があった。戦争によって全て消失し、戦後再建されずに現在に至っているが、その足跡を残す風景づくりへの取り組みも見られる。

なか
ゆくい

那覇港・見送り風景

沖縄の経済は厳しく、住民が出稼ぎとして海外や本土へ行くために港が利用された。

写真は、出発しようとする汽船2隻と、それに乗って本土へ行く人を見送る人々。人々の服装を見ると、普段着とは違い、皆正装をしてきているのを見ることが出来る。当時の人々にとって、本土に行くということは、人生最大の旅立ちであったに違いない。そこには、1950年～1960年代に見られた紙テープが乱舞する光景は見られないが、それゆえに、より人々の悲壮感が漂っているように思えてならない。



船に乗り込む人々と、それを見送る人々(那覇港)



船が主要な交通機関であり、港は出会いと別れの場所であった(那覇港)



明治初期の明治橋の風景(那覇市)



戦前の崇元寺前の風景(那覇市崇元寺)

02-02 沖縄の伝統的風景

2

沖縄の
伝統的風景を
今に伝える
素材や工法



建物の 材・工法

主な建築様式

板葺きから
木造瓦葺き
(黒瓦)へ

日本本土からの木造建築技術の導入や中国文化の影響を受け、貫木屋(ぬきぎや)形式の木造建築で城や社寺、貴族(王子・按司など)や士族



貫木屋形式

の住居などが建てられた。また、首里や那覇では土族を中心に一般庶民も板葺きから木造の瓦葺きに変わっていった。瓦は、当初黒瓦であったが後に赤瓦が主流となっていた。

民家
明治以降民家も
赤瓦の屋根に

グスク・三山時代、琉球王府時代の民家は、穴屋(掘つ建て小屋)と呼ばれ、屋根は茅葺き、壁は山原竹を網代のようにし(チニブ壁)、床は藁葺きか竹床であった。時代を追って、民家にも貫木屋が普及していく。



点在する茅葺きの家(1980年)(国頭村安波)



竹の床

明治(22年)以降、地方も、建築規制が無くなり、だれでも瓦の住宅を造ることができるといふようになり、裕福な家から瓦葺きの家になっていく。



伝統的家屋(竹富町)

屋根材
瓦は、
赤色だけではでない

瓦はもともと赤ではなく、古くは黒瓦(還元焼成の方法で作られた灰色の瓦、高麗瓦・明瓦・大天瓦)が城や社寺に用いられたが、その後、瓦焼造は中断、板葺きに変わり、17世紀末になって赤瓦葺きが盛んとなる。

屋根葺きの特徴は、牡瓦、牝瓦、軒瓦を組み合わせて噴き上げ、瓦の隙間を漆喰で固めた構造にある。



黒瓦(高麗瓦)

琉球王朝時代の士族屋敷の原形をとどめる宮良殿内(石垣市)

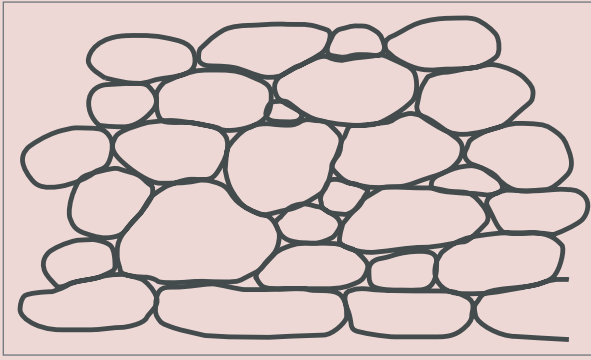


石積み
の工法

時代、
地域で異なる
石積み工法

① 野面積み

最も簡単な積み方で、大規模な建造物はできない。先人達が身近で多く採取される琉球石灰岩を使用して構築しようとした初期の工法といえる。また、今帰仁城では、堅牢な古生代の石灰岩のため、加工のいらぬ野面積みが採用された。各地域で産出さ



れる石材の性質により、工法や形態が異なるのも大きな特徴である。粗野な印象の反面、自然に近い荒々しさ、たくましさ風景的に演出している。



野面積み(ヤハラヅカサ御嶽)(南城市)



野面積み(今帰仁城跡)(今帰仁町)

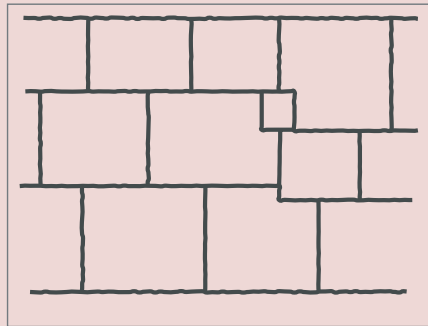
② 布積み

方形に加工を施した比較的大きな石を基本に、精巧に積み上げる高度な技法。主に格

式の高い施設の要所や門の側壁、大規模な屋敷囲いの石塀などに用いられる。風景的には重厚かつ安定感を印象づけ、琉球石灰岩の表面に人工的に丁寧に施された気孔は、重量感を軽減させ柔らかくで自然な感じを演出している。



布積み以外にも野積み、あいかた積みが採用されている中城城跡(中城村)



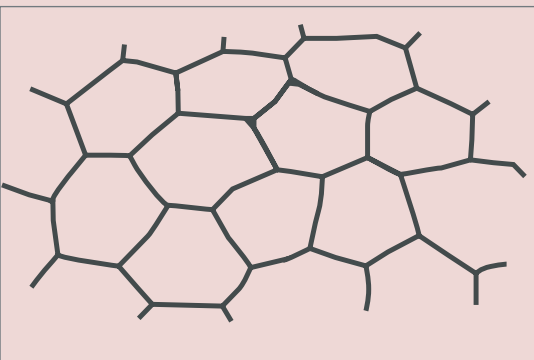
③ あいかた積み

石積み工法の最も進化したかたちで、沖縄独自の工法である。ほぼ六角形に近い形状で切り出し加工した大きさの異なる石を基本に、様々に



布積み(首里城跡)(那覇市)

組み合わせながら仕上げる。連続した面の組み合わせによる線形や雰囲気は、風景として安定的で柔らかく、リズム感を演出している。



あいかた積み(首里城跡)(那覇市)



あいかた積み(座喜味城跡)(読谷村)

土木の技術

石畳(道)

道路風景の構成要素

地域と地域を結ぶ道を歩きやすい道として、また豪雨にも耐える道として維持していくために、路面に石を敷くことは有効な工法であった。石畳道の敷石の平面的配列は、大小の石のかみ合わせに精粗があるが、重要な街道では丁寧な工夫が見られるなど沖縄らしい伝統的風景を今に残している。



所々に残る石畳(恩納村比屋根坂)



駐車場・バス発着場として利用される広場(糸満市喜屋武)



推定樹齢100年以上という松並木(今帰仁村仲原馬場)

沿道の松並木

琉球松並木

琉球王国では、古くから弁ヶ嶽(べんがだけ)や万歳嶺(ばんざいれい)などの拝所及び参詣道に琉球松を植えてきた。宿道などの街道でも松並木が整備された。仲原(なかはら)馬場に見る琉球松並木などその影響をとどめている。



仲原馬場(今帰仁村)

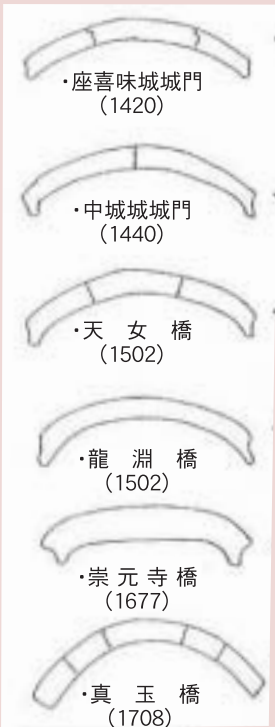
石橋

琉球型アーチ構造

沖縄の石橋は、石造りアーチ橋である。沖縄のアーチ部

は、垂直の側壁を伴い、輪の形状に半円に加えた扁平形状である。九州の石造りアーチは、側壁を用いる例がほと

んどなく、基礎部分からアーチが形成されているのに比べて、独特の形状である。



座喜味城城門(読谷村)



崇元寺石門(那覇市)



天女橋(那覇市首里)



龍淵橋(那覇市首里)

石造りアーチ橋の一般形状

(出典:『沖縄の土木遺産』編集委員会編2005)



識名園の御殿(那覇市宇真地)

造園技術

庭園 琉球独特の

識名園(しきなえん)は、1799年につくられた琉球王家最大の別邸で、国王一家の保養や外国使臣の接待などに利用された。識名園を代表とする琉球庭園は、日本庭園の様式を主調とし、これに中国庭園の様式を加味して造り出された琉球独特の庭園風景を現在に伝えている。

伝統の デザイン

大きさを演出するデザイン

巨大な島
大琉球として
見せる工夫

尚王家の別邸「識名園」は中国皇帝の使節「冊封使」を歓待する迎賓館として機能していた。そこに設けられた展望台「勸耕台」は海が全く見えない角度でつくられており、使節「冊封使」に対して、広大な陸地が存在するかのように見えることで、巨大な島大琉球を演出した。

また、小さな御嶽の何もない空間ゆえの大きなスケール感、参道の小道のちよつとしたカーブが演出する奥行き感など優れた演出力が様々な場面で発揮されている。



展望台「勸耕台」より眺める風景(那覇市識名園)

美しい 集落の色合い

伝統集落の色合い

伝統集落の色合いは、白い道と石積みのかすんだ色の対比、濃い緑の屋敷林と漆喰で固めたくすんだ赤瓦の大きな屋根、青い空の取り合

せである。また、屋根の上で様々な姿態で家を守る魔よけのシーサーやアカバナなどの花々がアクセントとなつて、個性的で色彩あふれる風景を形づくっている。



美しい集落(竹富町黒島)

色彩 伝統的な色彩

沖縄の色の特徴は、鮮やかさにある。紅型(びんがた)に代表される紅、青、黄、紫などの鮮やかな色彩の文様の取り合わせは、日本、中国、南方系の影響を受けながら18世紀には成立したとされ、沖縄独自の文様が生まれた。こうした鮮やかな色彩は、伝統の衣装の範囲にとどま



紅型の南国的色彩と鮮やかな模様



赤瓦屋根と白漆喰のムチのコントラスト(南城市)



首里城正殿壁面に塗装された久米赤土の色(那覇市首里)

らず、首里城などの建物にも及んでいる。



沖繩の
伝統・文化と
人々の
関わり

02-02

沖縄の伝統的風景

3



なりわいの風景

農の営み

農の伝統文化を 残す風景

野國(のくに)総官が甘藷(1605年)をもたらし、儀間眞常(ぎましんじょう)が製糖技術を伝え(1623年)さとうきび作りが盛んになる。

また、豊年を祈る神事として各地に伝わる綱引きは、稲作が盛んであった時代の名残りであり、現在も水田跡や水源地の姿をとどめる地域がある。

干ばつへの対策として造られた池、潮害から畑を守るための樹木による畑囲い、いのししの害への対策である猪垣など、厳しい自然の中で行われた農業の営みの足跡は、伝統的な農の風景となって今日に伝わっている。



農の風景

漁の営み

サバニのある 風景

漁場は、ナバと呼ばれた。那覇、小那覇、我那覇、与那覇など、それが転化したも

のといわれている。

船の変遷をみると、まず10世紀ごろに、割り舟(くりぶね)が造られた。17〜18世紀には、板材を継ぎ足したサバニが使用されるようになり、浜に並ぶサバニは漁の象徴であった。また、投げ網、トロール網など漁で活躍した。

現在は、ハーリー競漕用のサバニを見る機会が増えた。漁のためにサバニが使われることは少なく、砂浜にサバニがあるという風景も滅多に見ることができなくなった。しかし、今も海辺の堤防や民家の石垣にいていねいに投げ網が干してある風景に出会う。海人の島の伝統の香りがする。



浜比嘉島のサバニ(うるま市浜比嘉)

共同体社会

まつり 風物詩

数多く残る沖縄のまつりは、生活と密着した風物詩として、沖縄らしい風景を彩る要素となつている。代表的なまつりを紹介する。

旧暦5月4日ごろ、漁村では節目の日として、1年で最も大きな祭り、ハーリーが行われる。ハーリーの当日は、朝ウタキ(御嶽)に詣でて、豊漁と航海の安全を祈願する



イザイホー(南城市久高島)



ハーリー(那覇市)



綱挽き(那覇市)

儀式が行われ、その後港内で勇壮なレースを繰り広げる。ハーリーは、海と陸の生活の関わりを感じさせる風景要素の一つである。



種取祭(石垣市)



八月踊り(名護市)

沖縄本島とその周辺地域の盆踊り・念仏踊りをエイサーという。旧暦7月15日のウークイの晩、サンシン(三線)や太鼓を持った若者たちが、行列をなして家々をめぐり踊る。最近では、沖縄を代表とする夏の風物詩として定着し、お盆に限らず一年中披露されており、沖縄独特の生活色をかもしだす重要な風景要素の一つである。



イベントでのエイサー(那覇市)

9月から10月にかけて、八重山諸島を中心に行われる農耕儀礼で種取祭がある。地域によってタントウイあるいはタニドウルと呼ばれる。本来は種まきに合わせて、種子の無事な発芽と豊作を祈願する行事である、祈願の後には、奉納の芸能を行う。竹富島では立冬のころユームチウタキ(世持御嶽)の広場で様々な芸能が演じられる。



喜名ハタスガシー(読谷村喜名)



カジマヤー(南城市)



このような広場は、集落を形成する重要な場所となっており、沖縄らしい風景づくりを実施するためには、このような祭祀の場の保存と活用方法を考慮する必要がある。

首里赤田のミルクスネーイ(那覇市首里赤田)

結(ユイ)

安心のある くらしの風景

農村集落で古老や熟年の地域リーダーに聞き取りをすると、きまつて結(ユイ)が大きな役割を果たしてきた話が出る。さとうきびの収穫時はもちろんのこと、道の普請においても個人の家の普請においても、住民は互いに応分の負担を持ち合っ

て地域の運営をなしてきた。それは事業面にとどまらず、村落共同体として精神的支柱でもあった。



結の風景

シマぐるみの参加で湧く学校行事、ハレやかなカジマヤーパレード、出演者も裏方も見る人も一体となつて盛り上がるまつり芸能、順序よく段取りされ協力して進められるキビ刈りなど、結の精神は今も地域のくらしの風景を彩る。

祖先崇拜

祖先との交流

沖繩の祭事行事は、今日でも旧暦に準じて行われているものが多い。旧正月や旧盆の行事をはじめ、清明祭やウマチー(文字通り「おまつり」のこと)と呼ばれる拝みの行事が一門や地域・集落の年中行事として展開される。ふるさとを遠く離れている人は、ふるさとをのぞめる地からの「ウトーシ(お通し)」儀礼で行事に参加する。那覇市三重城の地などは、拝みの季節には「ウトーシ」のメッカといわるほど人(特に帰省しない宮古や八重山の人々)が集

まつてくる。また、清明節にあたる時期の土曜・日曜では、各地の墓地がピクニック地さながらのにぎわいとなる。一族が重箱やお供えを持ち寄り、門中墓の前で談笑する風景は、沖繩の春の風物詩の一コマである。

住まい方の 知恵

集落の空間構成

風水と「気」

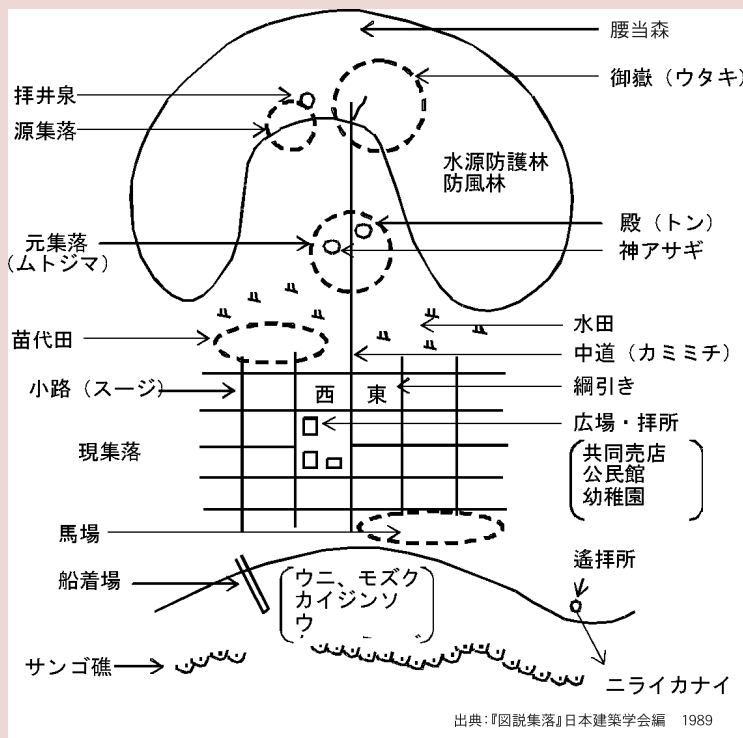
琉球王国の時代に伝えられた風水思想は、王城の地首里のまちづくりをはじめ、地方の集落・屋敷づくりや亀甲墓のつくりにも大きな影響を与えた。

風水には、「気」というキーワードがあり、一種のエネルギーと考えることができる。



清明祭

「気」は、高い山から麓に下り、山の麓から湧き出す。うまく「気」をとらえ逃がさないようにすることが重要と考えられてきた。周辺の丘・森(腰当森・クサティムイ)に集落が囲まれ、防風・防潮林が集落の「気」を逃さない役目をしており、屋敷において、それぞれの屋敷林とヒンプンに対応すると考えられる。それが上手に台風対策にもなっている。



出典:『図説集落』日本建築学会編 1989

伝統的集落構造の模式図



T字路の写真

集落の道と屋敷囲い 豪雨・強風への 備え

近年まで集落内の道は、土の道、砂の道、石の道であった。砂を意図的に道や庭にまいたり、石を路面に並べて石畳道にするのは、豪雨への対策となる道そのものの保全と、安全衛生上(水はけ、除草など)のねらいなど、先人の叡智が働いたものである。屋敷囲いの石垣が整然と並びながら集落内の道が決して直線的でないことや、T字路が意図的に配されていることなどは、強風を和らげる知恵である。

軒の深い急勾配の屋根を持つ開放的な住宅と、小さな菜園のある屋敷地を石垣と屋敷林で囲い、オープンな出入口にはヒンプンを配するなど、しつかり風雨への対策を備えた伝統集落には「用」の風景の魅力がいっぱいである。

シーサーと石敢當

魔よけ願いの 風景

今日、シーサーと石敢當は、集落にとどまらず都市空間の中、例えば、市役所やオフィスビル、商店街などいたるところにあふれている。

シーサーが沖縄に伝わったのは、14、15世紀ごろと考えられ、神社、墓、宮殿に使用したとされる。17世紀ごろから一般住民にも伝わり、石製のシーサーが集落入り口に置かれ、魔よけの役目を果たした。漆喰や焼き物のシーサーが普及したのは、明治以降、一般住民に瓦葺きが使用されるようになったあと、屋根

上に魔よけとして据付けられたと考えられている。一方石敢當は、もともと中国起源の除災招福の石柱で「石敢當」の文字が刻まれている。全国各地にあるが沖縄には特に多くみられ、T字路の突きあたりや道の曲った位置に立てられた風情は、沖縄の個性的な風景のひとつとなっている。



シーサーの使用例

水のある風景

カー、ガー、 ヒージャー

方言で○○カー、△△ガー、□□ヒージャーなどと呼ばれるのは、井戸または用水に使われる湧水源を指している。生命の水の湧く場所を、

地域の人々は聖地として尊び、ていねいに水の使い分けを行ってきた。上水道の普及が生活様式を一変させた今日にあっても、その名残りは、ウブガー(産水を汲む井泉)やウエーガー(村のものになる井泉)などといった多様な呼称と、ていねいに石積みが施された構造、石の香炉を据えた拝みの場の形で今日に伝わっている。水のある空間の多くが巡拝の聖地であり、

沖縄伝統文化のかけがえない空間として生きている。



カーの写真(糸満市)

【なかゆくい】沖縄の芸能 一沖縄の組踊一

組踊は、今から1719年に首里城内の特設舞台ではじめて上演された、沖縄唯一の古典劇である。創始者は、首里に生まれた玉城朝薫(たまぐすく ちょうくん:1684-1734)である。彼は、本土の能狂言・歌舞伎・人形浄瑠璃にも精通していたので、「組踊」を創造することができた。初演は「執心鐘入」と「二童敵討」が上演されたが、踊りがものを言うということで、笑う人が多かったが、演じられるにしたがって、見るものに深い感動を与えたという。

組踊は、昭和47年に国の無形重要文化財に指定された。



執心鐘入のあらすじは、女の男への一方的な好意が、最後には女を鬼に変身させるが、男の逃げ込んだ寺の座主の法力によって退散させられる。写真はその一場面。



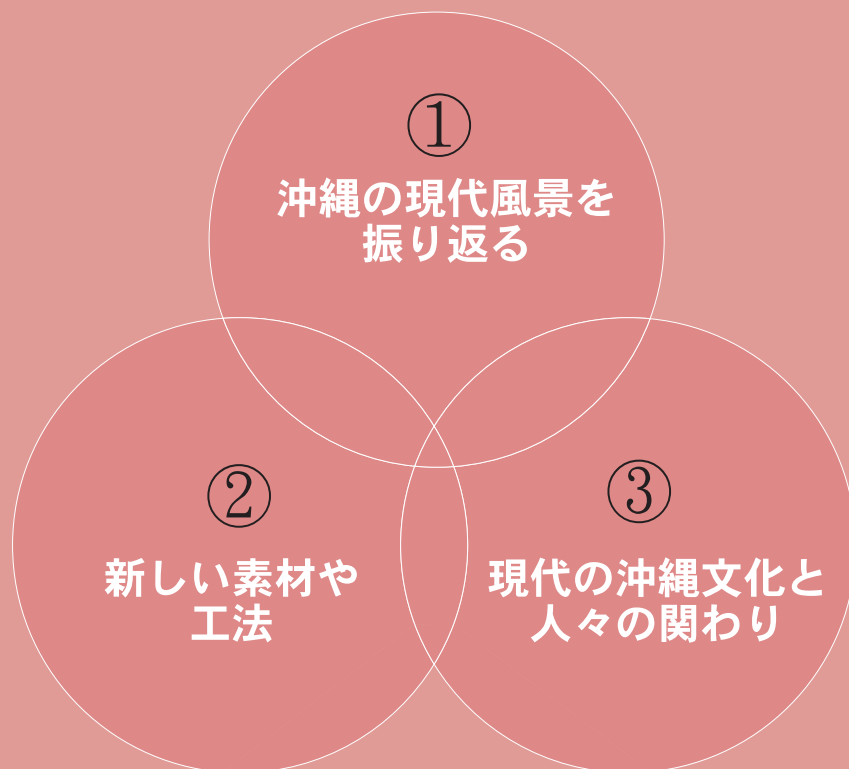
二童敵討は、歴史上有名な中城城主護佐丸と勝連城主の阿麻和利の争いを題材にしており、阿麻和利の首里王府へのざん言によって滅びた護佐丸の遺子が見事に父の敵を討つというもの。写真はその一場面。

沖縄の

「人とくらし」

の風景

沖縄の近現代風景は、
沖縄の社会的・歴史的な
変動の上に形成されており、
特に戦後のアメリカ統治の時代には、
沖縄のくらしの風景は一変する。
さらに本土復帰以降から今日に至るまで、
沖縄の市街地や地域の風景は
大きく変化しながらも、
新しいくらしの風景を誕生させてきた。



02-03 沖縄の人とくらしの風景 ①

沖縄の 現代風景を 振り返る





沖 縄 の
風 景 の 改 変

【都市の発生】
戦後復興の象徴
“国際通り”

那覇市国際通りには、デパートや個人商店、映画館などが立ち並んでいた。国際通り周辺は、経済・商業の中心地であり、戦後復興の象徴にもなった。

しかし、急激な都市化が進み、狭小な街路、公園緑地の不足などの都市計画上の問題や、スプロール化が深刻なものとなった。



1950年ごろの壺屋(那覇市壺屋)



栄町の市場(那覇市栄町)

【マチグワワーの形成】
沖縄の市場“マチグワワー”

那覇のマチグワワー(市場)は、戦後、米軍の開放した土地に居住を求めたものが集まり、商売を始めたもので、牧志や栄町市場がその代表である。近年までマチグワワーは庶民の生活を支える地域拠点であったが、大型店舗やコンビニの進出などによって衰退する方向にある、一方マチグワワーには、相互扶助を大切にすることをユニティや伝統食文化の見本市、方言の飛び交う雰囲気などを求めて来る観光客も多い。

【基地建設、基地の街の形成】
チャンプルー文化

広大な基地施設、建築様式のアメリカーナイズ化(RC造の増加)や基地門前街(コザや北谷など)が出現した。

本島中部地域の国道58号沿いには、フエンス越しに広大な基地が左右に広がり、検問所や軍用車以外にも、学校、病院、柵のない広い庭を持つ住宅など、広大なアメリカ的風景が今に残っている。コザ市(現沖縄市)は、基地に駐留する米兵を通じて、アメリカ文化の影響を大きく受け、独特の雰囲気を持つ基地門前街が形成され、沖縄の文化と異文化が混ざり合ったチャンプルー文化が発達した。



コザの街並みは横文字看板があふれている(沖縄市)

国道58号からみる嘉手納基地(北谷町)

【木造瓦葺きとコンクリート住宅】
民家の木造瓦葺きやコンクリート住宅の普及

戦後は、経済復興とともに、まず木造瓦葺きが広まったが、やがて、アメリカから輸入されたコンクリート住宅が、沖縄の気候条件にも有利であることから、速いテンポで普及していった。屋根形状も陸屋根と小屋組みの寄棟屋根が混在するようになった。



コンクリート住宅の普及による陸屋根化



昭和40年ごろの国道58号(浦添市)

【道路の再整備】 ホコリが舞う 砂利道

日本本土とは異なる制度の中、道路整備が行われた(軍道、政府道、市町村道)。未開通地域にも米軍と琉球政府による整備で道路が次々と開通した。沖縄の照りつける日差しの下、白く乾いてホコリの舞う道であった。

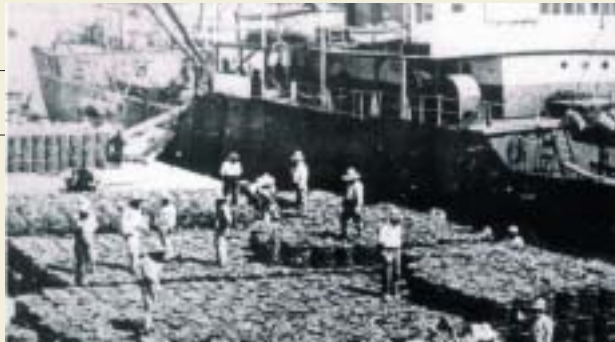


サトウキビの花

パイナップル畑
(東村)

【農地風景の変化】 稲作の減少とさとうきび、パイナップルの増加

稲作は、戦後10年で、戦前の水準を上回り、1961年には3万2000トンといふ、かつてない生産量を誇ったが、その後さとうきびに替わり、減少した。本島は戦後から、パイナップルの生産が本格的になり、日本市場に輸出するようになった。



1927年頃の三重城(現那覇ふ頭)棧橋架設以前は、旅客や物資を伝馬船で停泊中の船に運んだ(那覇市)

【港湾の急速な整備】 経済復興に伴い 急速に整備された 那覇港

第2次世界大戦後、壊滅した那覇、泊の両港は、米軍に接収され、米軍による大幅な改修工事が施された。工事後那覇港は2万トン級、泊港は3千トン級船舶の係留が可能となった。

昭和29年、那覇港の北岸が当時の琉球政府に、泊港が那覇市に返還され、それぞれ管理運営されるようになった。一方、戦後の経済復興にともない、港湾取扱貨物量が年々増大し、港湾の機能拡大を図ることが急務となり、安謝(あじゃ)に新港の開発が進められた。



第2次大戦終盤、連合軍の米軍爆撃機によって那覇市内は焼け野原になった。戦後、沖縄の人々は大変な努力を払って、那覇の街を復興させた。その象徴が国際通りで、戦前の湿地帯からの変貌が奇跡のようであるとして「奇跡の1マイル」と称された。奇跡の復興を遂げた国際通り(那覇市)

なかい
くい

「奇跡の1マイル」 那覇国際通り



伝統的風景と
現代文化の融合

1972年の本土復帰後、都市化と過疎化の進展、高度な土木技術を背景とした社会資本整備、歴史文化の再認識と快適環境づくりの試みなどが行われてきた。

【市街地整備】 市街地における 風景の演出

中心市街地における建築物



都市景観(那覇市)

の高層化、巨大化、周辺地域の市街地化が進んだ。広場、公園においては、まつりなどが盛んに行われ、賑わいに溢れている。
市街地における道路では歩道整備の充実や、電線類地中化などにより、街路樹の緑陰と整備された道路がすっきりとした沿道の風景をかもし出している。

【基地跡地での市街地整備】 那覇新都心など

返還された基地跡地の多くが新しい市街地に生まれ変わっている。近年の那覇新都心では、職住が隣接した商業・業務用途と住宅用途が共存する中高層の共同住宅の風景が見られる。さらに、商業地域においては賑わいと活力に満ちており、今後も多くの施設が整備・計画されている。



整備が進みにぎわいを見せる那覇新都心(那覇市おもろまち)

【公共建築様式の変化】 多様なデザイン

建物による景観形成のけん引役を果たしたのは、公共建築であった。

【1970年代中期まで】米軍建築物の影響を受け、現代建築(モダン様式)の平滑な壁面、陸屋根が主流。

【1970年代後期から1980年代後期】ポストモダン様式に移行。様々な屋根(勾配、アーチなど)が出現。
【1990年代】地域性を加味したポストモダン様式。



浦添市美術館:1989年(浦添市)



南城市文化センターシュガーホール:1994年(南城市)



国営沖縄記念公園沖縄館:1975年-1998年(本部町)



沖縄県庁(那覇市)



沖縄万座ビーチホテル&リゾート(恩納村)

【大型建築物、リゾートホテルの建設】
ランドマークの登場
本土復帰以降現代を特徴付ける代表的な要素は、ランドマークとなりうる大型の象徴的な建築物である。本土復帰に伴い、行政施設や文教施設といった公共建築物、さらにリゾートホテルなど、多数の大型建築物が整備されていった。

【住宅様式の多様化】
RC建築物や
プレハブ住宅の
普及
勾配屋根に赤瓦の伝統様式を取り入れたRC建築物が普及する。さらに、本土からプレハブ住宅が移入されるなど、住宅様式の多様化が進んだ。



陸屋根、赤瓦、プレハブ住宅などが混在している(那覇市末吉町)

【モノレールの開通】
日本最南端の
モノレール
平成15年8月、沖縄県民待望の沖縄都市モノレール「ゆいレール」が開通した。那覇空港から首里しゅりまでの12.9kmを、片道約27分で走行する軌道系定時・定速の公共交通機関である。地上平均10mの軌道上を走行する「ゆいレール」の姿は、那覇市のランドマークになりつつある。



ランドマークになりつつある「ゆいレール」(那覇市)



周辺風景に配慮して、橋脚の緑化を実施(那覇市)

【ロードパーク】 沿道風景が楽しめる道路づくり

国道58号名護市許田〜恩納村仲泊間25kmにおいて、従来の道路としての機能の他に、沖縄の地域の誇る素晴らしい自然風景を活かした道づくりが進められた。亜熱帯植物特有の緑の中にカラフルな花々が色取りを添え、自然風景と調和を基調としたロードパークとしての沿道風景を楽しむことができる。



残地を活用して沿道風景を楽しめるようにしたロードパーク(恩納村)

【橋】 離島を結ぶシンボリックな架け橋

離島に架かる橋は、シマチャビ(離島苦)を克服する役割を担っている。それは、島民の行動範囲の拡大による利便性の向上以外に、観光客や県内の他の地域から訪れる人々とのふれあいや多くの情報を島々にもたらした。また、橋自体が島やイノの風景の中でシンボリックな存在ともなり、一つの土木構造物が地元の名所となっている。



古宇利大橋(今帰仁村)

【港湾整備】 町と海のふれあいの場として整備される港湾

小規模な係留施設がほとんどであった港湾は、近年は船の大型化などに対応した整備がなされてきた。港湾は、人や物や情報が行き交う結節拠点であり、ウオーターフロントとしてマリレジャーの拠点、親水ゾーンとしての賑わいの場ともなっている。



宜野湾港マリーナ(宜野湾市) 三重城に造られた親水空間(那覇市)

【河川整備】 コンクリート護岸から多自然型へ

河川整備は、治水を優先させて、曲線を少なくしたコンクリートの護岸工事が数多く行われてきた。近年は、洪水対策と併せた自然との調和や、水に親しめる多自然型の川づくりが住民から求められており、河川環境にも配慮した整備等が進められている。やんばるの河川では、リュウキユウアユ等過去に損なわれた生態系を取り戻すため、自然再生への取り組みを行っている。



多自然型工法で整備が進められる奥川(国頭村)

【ダム】 山間部の親水空間

治水・利水などを目的とした多目的ダムは、周辺の自然環境を保ちながら、地域の人々の憩いの場ともなっている。展示資料やダムまつり・自然観察会などを通じて、子供たちをはじめ訪れる人々に自然と触れ合える機会を提供している。

また、ダム湖の風景は山間部におけるシンボル性のある親水空間であり、公園や展望台などの施設が地域の拠点ともなっている。



漢那ダム親水公園(宜野座村)

【人工ビーチ、自然海岸】 沖縄を代表する 「海岸風景」

沖縄の観光リゾートには、人工ビーチが多く、観光客や地元住民にとって一つの沖縄の美しい海を演出する役割を担っている。

また、沖縄の自然海岸は、自然の砂浜以外に、隆起した石灰岩と浸食によってできた「海崖」、「岬」、「断崖(ハンタ)」など多様な地形を見ることができ。そこには、アーサやモズクの収穫の生産の場、観光客、釣り人などの余暇を過ごす場など、様々な風景が見られる。



多くの人々にぎわう人工ビーチ(本部町)

【海洋博記念公園】 本島北部の観光拠点



沖縄海洋博記念公園(本部町)

海洋博記念公園(国営沖縄記念公園海洋博覧会地区)は、昭和50年に開催された沖縄国際海洋博覧会を記念して、翌年に博覧会跡地に設置された国営公園である。近年は年間250万人の観光客が訪れ、本島北部の観光の拠点として中心的役割を果たしている。海を背景とした熱帯ドリムセンターや美ら海水族館、ビーチなどシンボリックな風景が展開されている。

【首里城】 琉球王国のシンボル

450年の歴史を誇る琉球王国のシンボル首里城は、復帰後に本格的な復元要請活動が起こり、近年、首里城公園(国営沖縄記念公園首里城地区)として復活した。園内の歴史的建築物や史跡には、中国や東南アジアの影響で、独自に発展した琉球文化が花開いている。

首里城では、首里城迎春の宴(1月)、首里城公園子供まつり(4月〜5月)、首里城夏まつり(8月中旬)、首里城祭(11月)などが行われおり、地域の伝統文化を活かしたくらしの風景が作り出されている。



首里城正殿(那覇市首里)



新しい素材や工法

02-03 沖縄の人とくらしの風景

2



構造用材としての

コンクリート

県下全域への普及

伝統的風景を

変えた

コンクリート住宅

台風による影響が大きい
沖縄では、本島、離島を問わず、鉄筋コンクリート住宅、
コンクリートブロック住宅
が普及した。コンクリートが
白蟻被害にも有効であるこ
とや、沖縄の風土に適する固
い建築材(マキ)の入手が困
難であることもコンクリー
ト住宅の普及を加速させた。



多くの地域で見られるコンクリート住宅

コンクリートデザイン

コンクリート材
がつくる表情

建物の表情に曲線が加わ
った。さらに、平滑につくら
れたコンクリートの表面は、
冷たく硬い印象だが、打ち



平滑なコンクリートの肌

欠き、洗い出して表面に肌
合いをつくりだすことによ
り、豊かな表情と素材感が
生まれる。コンクリートは、
年月を経るにしたがって次
第に黒ずんで汚くなるよう
に思われるが、荒い仕上げ
を施したり、面を目地やパ
ターンで分割することで風
格あるエイジングを導くこ
とも可能である。



骨材洗い出し

新しい デザイン性

屋根材

地域で異なる
屋根材の表情

赤瓦は生産地が本島南部
であることから、伝統的集落
の屋根材として沖縄本島北
部より中南部で多く普及し
た。逆にセメント瓦は北部で

製造開始されたこともあり、北
部で普及した。今日、都市化
が進行する中でコンクリー
トスラブが主流となったが、
赤瓦については装飾的なデ
ザインとして建物の一部に
使われることも増えている。



赤瓦(沖縄市)



セメント瓦(久米島町鳥島)

鋼材や金属 金属やガラスを 素材とした 沖縄らしさの表現

高温多湿で塩害等の影響が大きい沖縄においては、鋼材はさびやすい。そのため、錆を防止・コントロールするか、または、錆の色・肌合いを生かすことで、素材のもつ特性を最大限に引き出すことができる。

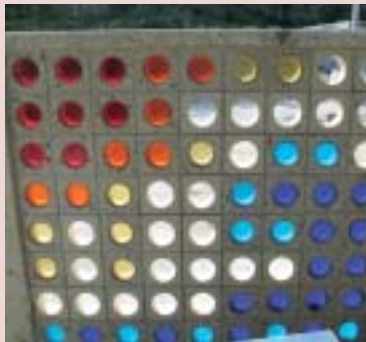
沖縄の歴史文化、自然等をテーマに優れた素材部、自由な形を表現する用材・媒体として、銅の青錆、茶錆を生かした公共建築の屋根のデザインその他、鉄や亜鉛等の素材とする案内板やモニュメン



ジンバイザメのモニュメント(本部町)

トがパブリックアートとして設置されている。

一方、沖縄独自の素材の一つである琉球ガラスには、細かい気泡やひび模様、色鮮やかさ等沖縄独自の技法が用いられている。こうしたガラスの特性を建築物の窓口等のデザインに生かし、沖縄らしさの光を演出する事例が増えてきている。



琉球ガラス(糸満市)

木材 心和ませる 木材

沖縄の気候では、木材は雨による腐食など耐候性の面で材として不利であるが、やわらかい自然材としての効用が重視され利用されている。

木製防護柵は、森林整備の段階で産出されるスギの中目材(直径18cm程度)と呼ばれる用途の少ない間伐材を使用し、違和感の少ない風景を創出する。



ダム堤体に使われている木柵(名護市羽地ダム)

花ブロック、アマハジ 伝統的・近現代的 デザインの継承

沖縄地方においては、強い日差しを遮り、通風を確保することによって快適な空間を得る必要がある。古くは民

家などで見られるアマハジ(雨端 軒下空間)、現在のコンクリート住宅における花ブロック(有孔ブロック)やルーバーや庇などの、様々な工夫が亜熱帯気候の中で培われてきた。



花ブロック(北谷町)



中村家に見られるアマハジ(北中城村)

色と影

アクセントのある建物

基調色を背景として、そこにちりばめられた様々なアクセントになる色彩があつてこそ、色彩の調和した風景は豊かで鮮やかなものになる。

主に建築物の外壁を対象として、色彩形成の計画に従い、建物の色に適切な色を使用するように誘導する「タウンカラースタンダード」を定め、色彩の面から美しいまちづくりをすすめるようとする取り組みも有効である。

また、強い日差しが建物に強く影を落とすことを積極的にデザインに盛り込むことも、有効なアクセント効果を発揮している。



白や白に近い色を基調に、赤瓦の色を引き立てる配色(那覇市首里)



歴史的な石畳イメージの歩道(那覇市首里)



遠景が白いまちと捉えられる那覇市(那覇市)

歴史、伝統の再生

舗装の美化化

伝統的な都市空間

歩道に琉球石灰岩を用いた美化化は、沖縄の伝統的

な表情を現在の都市空間に伝える。歴史的な道の整備では、歴史的意匠に十分配慮した素材・構造・仕様を採用することにより、道路の風景を通して地域の歴史と文化の継承に寄与している。

防風林

昔の街路樹は松並木

海浜地での植樹は、自然風景を演出し、また、防風・防潮の機能を有している。防風・防潮林は、琉球王朝の蔡温の林政政策により、道路沿いに松並木が整備され、現在でも樹齢を経た松並木が所々に残っている。海岸沿いの集落には防風・防潮林としてのガジュマルや

フクギなどが使用された。戦後、様々な外来種が導入されてきたが、最近では在来種中心の防風・防潮林が育成されるようになってきた。



所々に残る松並木(久米島)



座喜味城趾に残る松並木(読谷村)



歴史的なイメージを重視した真玉橋(那覇市・豊見城市)

失われた 風景の回復

石造による橋

近年の真玉橋の整備では歴史的なイメージの再生に取り組んだ。首里城がそうであったように失った風景を回復する取り組みの新しい事例となった。



今では数少なくなった伝統的風景(渡名喜村)

伝統的風景の 保存

木造赤瓦の建物

高温多湿で、台風常襲地の沖縄では、木造赤瓦の建物がコンクリートの建物に変わってきた。伝統的な建物が次々と消えていく中、まちなみ保存の地域活動が立ち上がり、竹富島や渡名喜村で伝統的な建物の景観保存条例がつけられた。竹富島と渡名喜島の集落全域が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、木造赤瓦の伝統的な建物の風景がその建築技術とともに維持されている。

【なかゆくい】 宿道(しゅくみち)、「国頭方西海道(くにがみほうせいかいどう)」の整備

琉球の歴史と ロマンを感じる海沿いのみちづくり

「国頭方西海道」は、王府時代の公道で首里城を起点に各間切番所などを結んでいた宿道の一部であり、読谷山間切の喜名番所から国頭や本部に向かう西海岸の道である。喜名番所から恩納番所に向かう西海道途中までは現在の国道58号とほぼ重なり、その名の由来となった恩納の仲泊は、昔から南部と北部を往来する人びとがなかゆくい(休憩)する場所であった。恩納村山田から仲泊の区間には国指定遺跡の仲泊遺跡をはじめ、石畳道や墓など貝塚時代前期から明治時代に至るまでの文化的価値の高い遺産が多く残されている。このため、1996年国土交通省の歴史国道に選定され、琉球の歴史とロマンを体験できるみちづくりとして全区間(3.6km)を7区分し整備が進められた。特に仲泊拠点地区では、国道58号沿道に「長虹堤」をイメージした歩道が設置され、また、かつての宿道ルートにアーチ型の石橋2基が復元されたほか、恩納村博物館や農水産物加工所、ふれあい市の設置など新たな道の拠点づくりが取り組まれている。



国道58号沿いの長虹堤をイメージした歩道(恩納村仲泊)



復元されたアーチ型石橋(恩納村仲泊)



現代の
沖縄文化と
人々の関わり

02-03 沖縄の人とくらしの風景

3



産業の風景

観光リゾート(北部地域)

リゾートの風景の魅力的な表情

沖縄を訪れる観光客の5割が北部地域へ立ち寄ると言われ、恩納村のリゾートホテル群、やんばるの自然、海洋博記念公園などは、沖縄本島を代表する観光地となっている。

最近の観光客は、レンタカーなどによる周遊型に変わってきており、これらの観光地では沿道を花々や亜熱帯樹木で演出するなどリゾートらしい修景に努めており、観光客に加え地元客のレクリエーション地としても賑わいに溢れている。

商業

広域化する商業地域

那覇市内の国際通り、マチグーとその周辺は、沖縄独特の雰囲気が漂う空間として、観光スポットとなっている。

また、モータリゼーションの進展によって、近隣市町村及び周辺部の大型商業施設など商業基盤の充実などによる商業地域の広域化、分散化が進んでおり、買い物や余暇を郊外の大型商業施設で過ごす家族も多い。

その中で、各地の既存商店街では、空き店舗も生じ、商業地としての魅力低下が大きな課題となっている。

農林漁業

変わり行く農林漁業

政策的に食料作物や、さとうきび、パイナップル、葉タバコなどの換金作物に力を入れてきた。近年は、肉用牛、花き、熱帯果樹などの生産が増加し、農村風景は激しく変化している。

日本全国で食べられているモズクのほとんどが沖縄産であり、養殖場も増えている。また、海岸沿いや岩場など遠浅の海でのアーサ取りは季節の風物詩の一コマであるが一年中養殖がさかんとっている。その他、車えび、魚類などの養殖も見られる。沖縄の美しい海は、ただ美しいばかりでなく、生活に欠かせない海の畑としての収穫風景がある。



カヌチャベイ(名護市)



多様なアミューズメント施設が集まる郊外型商業地(北谷町美浜)



車えびの養殖風景(南城市知念)

イベント

音楽の町

オキナワンロック・ポップス

コザは島唄(しまうた)と呼ばれる沖縄民謡の盛んな地域で、嘉手苧林昌や登川誠仁をはじめ、多くの民謡の大家を生み出した。また米軍統治時代には、アメリカのロックやジャズを取り入れたオキナワンロックが生み出され、復帰以降には、沖縄民謡、ロックやラテンなどを融合させたオキナワンポップスが生まれた。コザはまさに沖縄音楽の発信拠点であり、コザの歴史が個性的な沖縄音楽を育ててきた。



ピースフル・ラブロックフェスティバル(沖縄市)

まつりイベント

年齢や文化の違いを超え一体となった風景

那覇大綱挽きは、それぞれ20トン以上ある綱が中央で貫抜(かぬち)棒で結合され大綱が完成する。綱には手綱と呼ばれる枝綱がついていて、地元の老若男女、観光客、米国人、留学生らしき外国人など多くの人が年齢や文化の違いを超えて一つの綱を懸命に挽く風景が見られる。

名護市、与那原町、その他各地で大綱挽きイベントが実施されている他、ハーリーやエイサーなど県下では多彩なまつりイベントが季節感を盛り上げる。



那覇の大綱挽き(那覇市)

スポーツイベント

各地で開催されるマラソン

県下各地でマラソンイベントが催されるが、那覇マラソンはその走りであった。マラソンは走る人だけでなく、応援する人も、また、コースを彩る風景も全てを含んだ風景といえる。マラソンだけでなく、トライアスロンや自転車レース、ゴルフ、野球、キャンプなどスポーツイベントは新しい沖縄の風景を多彩に作り出している。



那覇マラソン
(那覇市)

夜のまつり

アンガマー、首里の旗頭

アンガマーは、八重山で旧暦のお盆に、請われて家々をまわり念仏謡やその他の歌舞を行う仮装集団である。着流しで、頬かぶりをしてクバガサ(ピロウの葉でつくった笠)をかぶる。冥界からやってきた遠祖神をあらわすウシュマイ(爺)、ンミー(婆)の2人が、それぞれ木製仮面を着用し、集まった観衆との間に機知に富んだ問答を行う。

首里文化祭では、古式行列や旗頭を中心としたパレードが行われる。旗頭とは、綱挽きの行事の応援旗のこと。首里の綱挽きは夜に開催されているので、「夜旗」とも呼ばれ、鼓燈籠と呼ばれる頭飾りに灯りを灯し、夜の闇に明るく浮き立つ。

竹富島の世迎い(ユークイ)も夜に各地を巡って行われる。まつり行事であり、地元住民や観光客も加わり、年毎に賑わいが増している。



アンガマー(石垣市)

生活の 見える風景



ビーチパーティー

夏はビーチパーティー

沖縄の美しい海浜は、リゾート地開発による地元産業の振興ばかりでなく、地域住民にとってはビーチパーティーが開催され、親戚、友人同士の親交の場として活用され生活の場の一部となっている。

夏は、毎年会社、友人、親戚同士でビーチパーティーを計画する人も多い。
(読谷村)

マリンレジャー

マリンスポーツのメッカ

恩納村の海岸は、沖縄の観光リゾート発祥の地であり、沖縄海岸国定公園にも指定されている。白い砂浜の多い海岸は、ビーチとしての賑わい、マリンスポーツのメッカとなっている。

また、県内各地で海浜は、スポーツ施設、ビーチやイベント会場を備えた海浜公園としても利用されている。



各地の海はマリンスポーツとしても多く利用される。

衣の文化

沖縄発かりゆしウェア

クールビズのモデルとしてかりゆしウェアが全国に発信されている。かりゆしウェアについては、2000年九州・沖縄サミット及び2005年4月のIDB沖縄総会で、各国の首脳が着用したことで有名となったが、地元ではそれ以前から愛用されてきたものである。

公共の場でもくつろぎの場でもかりゆしで行き交う人々によって爽やかさや涼しさが演出される。



かりゆしウェア

音楽のある暮らし

芸能達人な沖縄の人々

ウチナーンチュにとって歌や三線(さんしん)は、一つの芸能というよりは、生活の一部である。嬉しい時や祝いのときに大勢の人と喜びを分かち合いながら、沖縄三線を奏で歌い、また悲しい時に一人でも、沖縄三線を奏でる。

また、その他エイサーに使用するパーランクーやエイサー太鼓、踊りに使用する三板(さんば)などの楽器も加わり、沖縄の音楽やまつりをこよなく愛する人々によって、新しい音楽が生み出され発信されている。

祭りごと、祝いごと、日常の生活の中からも聞こえてくるサンシンの音色は沖縄の人々の心のよりどころとなっている



夜の飲食街

長い夜

沖縄の夜は、長い。他府県では、電車の時間などの関係から、日付が変わるまで居酒屋などの飲み屋が開いているのは、少ない。しかし、沖縄では、飲む人が多いのか、ゆっくり飲むのが好きなのか、タクシー代、飲み代などが安い、距離が近いこともあるのか、飲み屋も遅くから始まり、12時過ぎても煌々とネオンが輝いている。最近では、家族連れで夕食を居酒屋に来て食べている光景も珍しくはない。もあい風景も沖縄が独特の元気なくらしの風景といえよう。



沖縄の夜の風景(那覇市松山)

”美ら島沖縄”

風景づくりのためのガイドライン

01	総論「現代の沖縄風」を目指して.....	01
	01-01 沖縄らしい風景づくりの視点.....	05
	① 一括りにできない「沖縄らしさ」.....	07
	② 無秩序に使われてきた「沖縄らしさ」の表現と「地域らしさ」が反映されない沖縄の風景.....	09
	③ 沖縄らしく美しい風景と新たにつくられてきた沖縄の風景.....	11
	④ 地域の一貫した取組みと、調和のとれた風景が主役であることの認識.....	13
	01-02 沖縄の風景づくりの基本.....	15
	① 沖縄の「自然風景」.....	17
	② 沖縄の「伝統的風景」.....	23
	③ 沖縄の「人とくらしの風景」.....	29
02	「沖縄らしい風景」の個性と多面性.....	37
	02-01 沖縄の「自然風景」.....	39
	① 変化に富んだ沖縄の自然風景.....	41
	② 多種多様な自然素材.....	49
	③ 沖縄の自然と人々の関わり.....	55
	02-02 沖縄の「伝統的風景」.....	61
	① 沖縄の伝統的風景を振り返る.....	63
	② 沖縄の伝統的風景を今に伝える素材や工法.....	71
	③ 沖縄の伝統・文化と人々の関わり.....	77
	02-03 沖縄の「人とくらしの風景」.....	83
	① 沖縄の現代風景を振り返る.....	85
	② 新しい素材や工法.....	93
	③ 現代の沖縄文化と人々の関わり.....	99
03	「現代の沖縄風」実現に向けて.....	107
	03-01 沖縄を訪れる人達が魅力を感じる風景づくり.....	109
	① 観光リゾート.....	109
	② アーバンリゾート.....	115
	③ ウォーターフロント.....	121
	④ 夜景の演出.....	127
	03-02 生き生きとしたくらしの中の風景づくり.....	133
	① マチぢゅくい(都市).....	133
	② シマぢゅくい(集落・地域).....	139



第三章

「現代の沖縄風」
実現に向けて

「現代の沖縄風」実現に向けて

前章では風景づくりの基本となる「自然風景」「伝統的風景」「人とくらしの風景」の3つの観点から、沖縄の風景が持つ独特の個性と多面性を取り上げた。

沖縄各地域における風景は、それぞれの風土の中で培われてきたものであり、美しく質の高い貴重な文化資源として沖縄の人々の誇りである。また、沖縄の外から訪れる人々にとっては、魅力ある観光資源でもある。

本章では、こうした今までの沖縄の風景を保全・継承しつつ、地域ごとにそれぞれの特色を出してつくりあげる、新しい沖縄らしさ、これからの沖縄らしさである「現代の沖縄風」実現に向けての風景づくりの方向性を、近年の状況の変化を踏まえつつ、述べることにする。

地域ごとに「現代の沖縄風」の風景を新たに形成していくことは、地域の「顔」づくりであり、地域のアイデンティティの形成である。そのためには、全国的な基準に基づき整備が進められてきた基盤施設が各地の地域らしい風景を失わせた反省に立ち返る必要がある。また、沖縄らしい風景をこれから再生していくには、いくつかのテーマを設定して、戦略的なプロジェクトとして取り組む必要がある。

沖縄といえば「白い砂浜と青い海」が象徴的であり、その自然環境は極めて魅力的である。また、沖縄特有の歴史と文化、人の生活は、沖縄らしい風景を形成する原

点である。このような要素を活かした「現代の沖縄風」の風景づくりは、沖縄振興のリーディング産業に標榜される観光産業の振興にも貢献するものであり、「沖縄を訪れる人達が魅力を感じる風景づくり」ともリンクするものでなければならぬ。

その一方で、「観光はまちづくりの総仕上げ」と言われる。観光振興のためにまちづくりをするのではなく、良いまちづくりができているからこそ、その仕上げとして観光振興が可能となる。

良いまちづくりとは、地域社会が安全で、産業活動が安定して活気があり、豊かな自然と文化・歴史が脈々とした魅力を発し、人々のくらしが快適で生き生きとした楽しい地域とすることで、そういうところで観光は成り立つ。そのためには、地域にくらす県民のためのものでなくてはならない。そのためにも「生き生きとしたくらしの中の風景づくり」という視点も重要である。

このような認識のもと、「現代の沖縄風」の実現のために、次の視点にたって重点的に取り組むべき事項を整理する。

1 沖縄を訪れる人達が魅力を感じる風景づくり

- ① 観光リゾート
 - ② アーバンリゾート
 - ③ ウォーターフロント
 - ④ 夜景の演出
- #### 2 生き生きとしたくらしの中の風景づくり
- ① マチぢゅくい(都市)
 - ② シマぢゅくい(集落・地域)

1 沖縄を訪れる人達が
魅力を感じる風景づくり

① 観光リゾート

観光リゾートの
風景づくりの重要性

沖縄県外からの観光客は年間550万人を超えてきた。今後も沖縄を訪れる人々がみな美しいと思えるような「沖縄風」を造っていくために、**沖縄のリゾートが、**他地域には無いオリジナリティと、観光客の近年多様化したニーズに対応した場の提供が不可欠である。そのためには、豊かな自然と多彩な伝統・文化を活かし、唯一無二の沖縄らしさを演出することが必要である。また、地域住民にとって住みやすい美しいまちづくりが観光客の満足度を高めるといふ視点も忘れてはならない。

これまでの流れ

● 昭和47年本土復帰以降、沖縄振興開発計画、沖縄振興計画のもと、美しい観光リゾート地整備がめざされてきた。

● 沖縄海洋博覧会により一時的に観光客が増加。その後は短期的減少を見たものの長期的には順調に伸びてきた。

● 行政主導のもとハワイやシンガポールなどの観光先進地やリゾート都市を手本とした風景づくりが行われてきた。

● 恩納村周辺市町村にもリゾートホテルが建てられる。

● 三次振計とともに、沖縄の自然や伝統的文化を創出するような質の高い観光リゾートの形成が重要視され、地域性に深く配慮した観光リゾートが見られるようになる。

● 四次振計として、国際的海洋性リゾート地の形成、健康保養の場の形成、コンベンション機能の充実、国内外の観光客受入態勢の整備が謳われる。

沖縄振興計画 平成14年 ～平成23年	三次振計 平成4年～平成13年						二次振計 昭和57年～平成3年				一次振計 昭和47年～56年		昭和47年 沖縄県復帰 中北部、 離島の主要ホテル 観光客数(人)		
	平成15年	平成11年	平成9年	平成9年	平成6年	平成5年	昭和63年	昭和63年	昭和62年	昭和62年	昭和58年	昭和54年		昭和53年	昭和50年
オキナワリゾート&スパ(名護市)	クラブメッド・カピラ(石垣市)	ザ・プセナテラス(名護市)	カヌチャベイホテル(名護市)	ホテル日航アリビラ ーヨミタリゾート沖縄ー(読谷村)	リザンシーパークホテル谷茶ベイ(恩納村)	ラグナガーデンホテル(宜野湾市)	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村	読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村 読谷村
550万人 (平成17年)	483万人 (平成14年)					315万人 (平成4年)			225万人 (昭和62年)		185万人 (昭和58年)	150万人 (昭和53年)	156万人 (昭和50年)	44万人 (昭和47年)	



分棟化により、ホテル自体目立たないようにしたプセナリゾート(名護市)



沖縄の西海岸に観光リゾートホテルが集中する中、東海岸の広大な敷地に、自然風景にうまく調和したカヌチャベイ(名護市)



昭和63年に読谷村で本格的なリゾートホテルとして誕生した、残波ロイヤルホテル(読谷村)



県内初の外資系のホテルとなったラマダ・ルネッサンスリゾートオキナワ(恩納村)



沖縄万座ビーチホテル&リゾートの立地と、経営的成功は、他のリゾートホテル進出の契機となる(恩納村)



ホテルとプライベートビーチをセットし、沖縄の先駆的な観光リゾートホテルとなったムーンビーチホテル(恩納村)



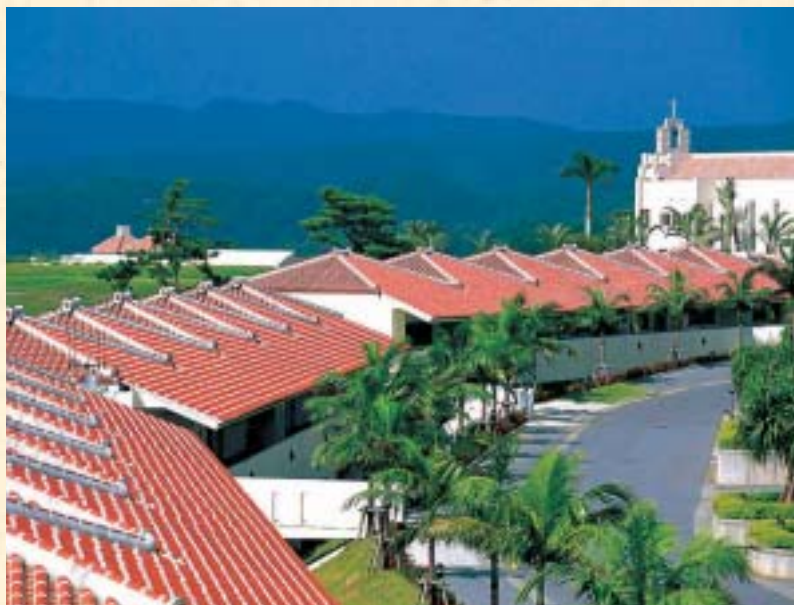
地域の 誇りとなる 美しい 観光拠点づくり

多彩な魅力を集積させた リゾートエリアの形成

●マリーナ、ゴルフ場、コンドミニウム、地元地域などの多彩な魅力を取り込んだリゾート開発の集積によって、美しい自然とのふれあいや、地域の文化とくらしを一体的総合的に感じられる観光リゾートエリアを創出する。

自然風景との調和による おさまりの尊重

●観光リゾート拠点の風景づくりとして、低く連なる後背丘陵地や海岸線の連続性がつくり出す眺望全体とおさまりを尊重することで、広がりある美しい自然を感じさせる観光拠点風景を演出表現する。



カヌチャベイ(名護市)



山地の地形を遮断する稜線上での施設配置を避けることが、今後重要である(浦添市牧港)

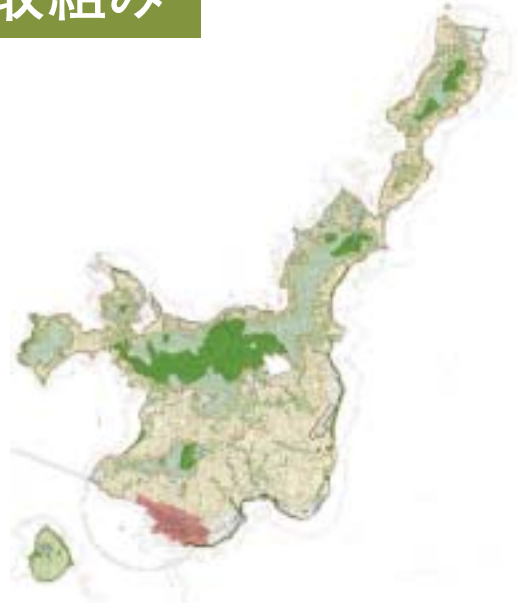


建物を分棟化し低くすることで、なるべく稜線より低く抑え、自然風景への影響を少なくしている(石垣市クラブメッド)

景観行政団体第1号 石垣市の取組み

新石垣空港の着工に伴い、島内の各所でホテルの建設が進められようとしている。

このような状況の中、石垣市はリゾート開発と美しい石垣島の風景との調和を図るため、県内で最初の景観行政団体となり、市民を交えて風景と調和した開発のあり方について議論を進めている。



地域社会との連携で美しさの演出

- 特にリゾートエリアでは、地域住民の美化活動などにより亜熱帯の風土に育つ色鮮やかな草木で地域を彩り、美しい観光リゾート風景の創出を心掛ける。
- リゾートエリアの魅力を付加する取り組みとして、地域に残る歴史文化財や伝統的構造物などを活用し、伝統文化に根ざしたくらしが感じられるような演出を心掛ける。



100年の歴史を持った古民家を修復し、琉球料理店として再生するなど、地域に残された伝統文化を活用して、新しい地域の魅力を創出している(那覇市)

北中城村大城「花咲爺会」による沿道景観の美化活動(北中城村)

観光リゾート
地域までの
経路の演出

地域ごとの演出と連続性の確保

●空港、港などから観光リゾート地域までの経路は、まとまりのある地域ごとに郷土性を
感じさせる樹種の植栽やデザインに一貫性を持たせ、ポケットパークや道の駅などにも
取り入れることで地域ごとの演出を図る。



琉球石灰岩や赤瓦を使用したポケットパーク
(宜野湾市国道58号宜野湾バイパス)



南国特有の植樹帯が、目的の地まで観光リゾートの
風景を演出する(那覇市国道58号)

美しい眺望を阻害する要因の改善

● 観光リゾートまでの経路においては、自然海岸を保全しつつ、区間によっては、イノーや島々が見渡せるように、眺望を阻害する構造物の改善に努める。



ガードレールがちょうど目線の高さであり、きれいな海が見えない(大宜味村津波国道58号)



高木だけの植栽により海への眺望を確保し、連続した観光リゾートの風景を演出している(名護市国道58号ロードパーク)



看板や幟などの屋外広告物のデザインや色彩を制限して、沖縄らしい観光リゾートの風景と調和した広告物にしなければならない(北谷町国道58号)



1 沖縄を訪れる人達が
魅力を感じる風景づくり

② **アーバンリゾート**

アーバンリゾートの
風景づくりの重要性

沖縄の魅力の向上のためには、
リゾートだけでなく、

観光客が滞在する主要な都市において、
沖縄独特の雰囲気・文化・歴史を

感じることでできる「現代の沖縄風」の
風景づくりが重要である。

例えば、那覇市には、復興の象徴とされ

「奇跡の1マイル」と言われる国際通りや、

沖縄の世界遺産の一つである首里城跡などがあり、

また、沖縄の食文化を体感できる

牧志公設市場など重要な観光資源が多くある。

しかし、観光資源として十分に活かされなければ、

観光客にとって魅力ある都市の要件にはなっていない。

アーバンリゾートとしての個性ある

都市づくりの明確なテーマを設定し、

観光資源を活用して魅力的な都市の創出や

快適な都市ツーリズムに寄与する風景づくりを

企画していくことが必要である。

これまでの代表的な取り組み

【首里城復元】

- 首里城復元期成会が結成され、首里城復元にむけての活動が行われた。
- 沖縄県がS59年「首里杜構想」を公表。
- 首里城公園は、沖縄の復帰を記念する国の都市公園事業として計画された。
- 琉球大学が移転した首里城跡地を国営公園区域、その周りを県営公園区域として整備し、1992年一部開園した。

【国際通り】

- 平和通り一帯の市場の形成が国際通りの繁栄の足がかりとなる。
- アーニーパイル国際劇場の建設後、昭和25年ごろからビルが次々と立ち並び、奇跡の1マイルとして成長。
- 復帰後、観光客向けの土産店舗が増えてくる。
- 平成に入り、大型店舗の域外展開とともに国際通りの繁栄に陰りが見えてくる。

現在	昭和47年	昭和23年	昭和22年	昭和20年	平成12年	平成4年	平成元年	昭和61年	昭和59年	昭和48年	昭和47年	昭和47年	
慢性的な車の渋滞が問題 国際通りの再開発として、 1万人のエイサーまつりやトランジット・モールの 社会実験が行われている。	店舗の4割が土産品店	平和通り一帯に市場ができる 牧志にアーニーパイル国際劇場が建設 本土復帰	開南近辺からヤミ市が発生	戦後	「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産登録	首里城公園一部開園	首里城正殿建築工事着手	整備事業閣議決定	「国営沖縄記念公園首里城地区」として	沖縄県が「首里城公園基本計画」策定	「首里城復元期成会」が結成	第1次沖縄振興開発計画で戦災文化財の復元が明記される	本土復帰



現在の国際通り(那覇市)



復帰前の国際通り(那覇市)



現在の首里城(那覇市)



戦前の首里城(那覇市)



地域資源を 活かした アーバンリゾート の演出

沖縄らしいテーマを持つ た魅力ある空間の創出

●個性ある地域資源を活かして、沖縄独特の雰囲気・文化・歴史を感じることが出来るアーバンリゾートの風景、つくり取りに取り組む。
●特に中心市街地において、観光客や地元の人々が分かりやすい沖縄らしいテーマを設定したまちおこしに取り組み、沖縄の人々の生き様、伝統が体感できるような交流拠点空間を創出する。

テーマ例

「市場とチャンプルー」「ラビリンス(迷路)」



平和通り周辺の風景
(那覇市)

公設市場や多くの文化を融合させたチャンプルー、復帰前の急速な市街化による路地空間(ラビリンス(迷路))などを活用し、沖縄独自の文化が織りなす街並みとなるような都市空間を演出する。

テーマ例

「グスクと街並み」「歴史的風土の保全」



龍潭通り(那覇市)

景観形成地域である龍潭通り沿線地区は、道路拡幅整備事業と合わせることで、壁面後退、建物の高さ、色彩などの意匠形態、敷地内の緑地化などの整備を進めることで、生活に密着した快適な環境の創出、古都首里にふさわしい歴史性の継承、首里の観光商業軸の形成を目的とした空間演出を行っている。



胡屋十字路 複合施設「ゴザ・ミュージックタウン」(沖縄市)

テーマ例

「音楽の町」

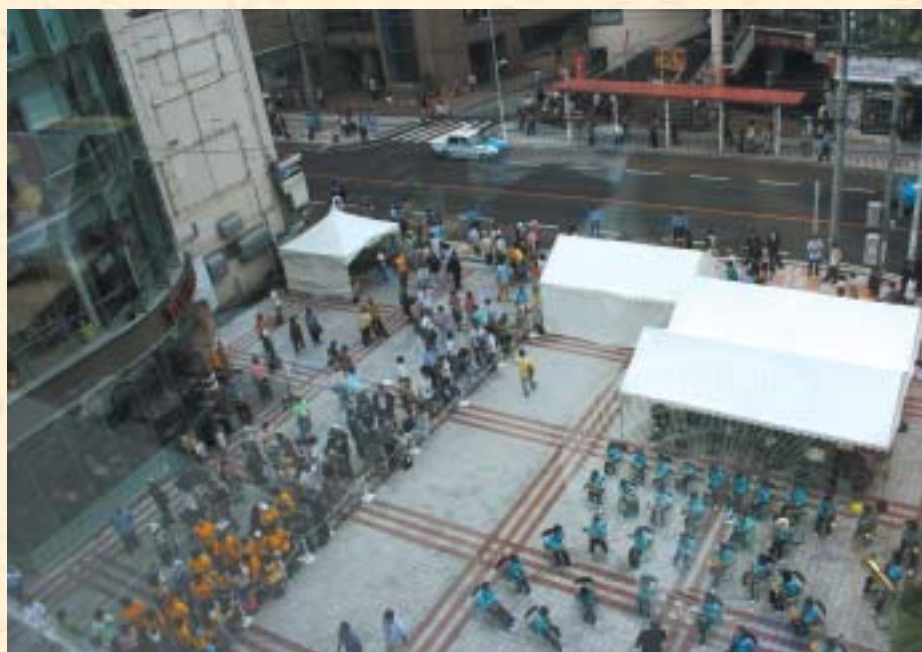
地域の雇用創出支援を受けて、沖縄市は音楽、芸能文化のガイドや専門スタッフを育成しており、ミュージックタウン構想のシンボルとして胡屋十字路の一角に複合施設「ゴザ・ミュージックタウン」を平成19年夏にオープンすることで、音楽観光の町となるような都市空間の演出を目指している。



観光客が多い平和通りの市場(那覇市)

市場(マチグワー)の活用

●沖縄の市場は、今でもアジアの陽気な雰囲気を感じられ、独特の賑わいを感じさせる。沖縄の都市独自の魅力の一つとして、市場(マチグワー)を観光客や地元住民を引き寄せる地域資源として活用する。



てんぶす広場(那覇市)

●地域の材を用いた憩いの場所、沖縄の伝統的音楽、まつりなどが見られる場など、沖縄の魅力を合わせ持ったアミューズメント空間を創出する。

「現代の沖縄風」
から発想する
魅力の向上

アメニティーの形成

●沖縄の強い日差しの中で、緑陰や水を創出することで、木と影のコントラストや涼しげで快適な空間を地元の人々や観光客に提供する。



緑陰空間が確保された公園(那覇市)

●地域のコミュニティの場として生活の中に生きているスージグワー(狭い路地空間)を魅力ある都市空間の一つとして保全・活用する。また、沖縄の伝統的要素を現代建築に取り込みながら、地域らしい建築や風景の創造に努める。



スージグワーは至るところに残っており地域のコミュニティの場としても大切である

(那覇市壺屋)



広場を利用した賑わい空間の創出
(那覇市パレット広場)

● 郷土のまつりや沖縄からの音楽発信に使えるような広場、オープンスペースなどのたまり空間など、現代のアシビナー（遊びの広場）を充実し、観光客や地元客の人々による賑わいを創出する。

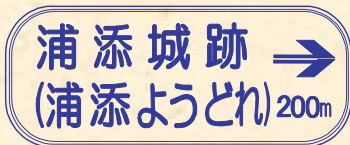
▶ 絵文字の使用、表現の統一など、分かりやすい標識を目指して、いろいろ工夫がなされている



▲ 赤をアクセントに使い、周辺と馴染むように配慮された案内看板(那覇市)

● 伝統的素材や新しいデザインの使用、設置位置を工夫することで、見やすく、分かりやすい、さらに沖縄の風景に馴染むように標識や看板を設置する。

風景になじむ標識、看板の設置



▲ 市町村道にこまめに標識を設置して、観光客や地元の人々をスムーズに誘導する取り組みもなされている

1 沖縄を訪れる人達が
魅力を感じる風景づくり

③ ウォーターフロント

ウォーターフロントの 風景づくりの重要性

沖縄の魅力としてエメラルドグリーン
の海や白い砂浜を外すことはできない。
そして、島嶼県沖縄の人々にとって
浜は身近にあって日々の糧を得る
大切な恵みの場であり、
また、港は物流・人流の玄関口として
港を介して多くの文化交流が過去よりなされてきた。
こうした、ウォーターフロントにあっては、
海岸などの水際への視点、
海への視点はもちろん、海からの視点にも
配慮した親しみやすい海岸、
港の風景づくりが重要である。

歴史的背景

— 那覇港を中心に見る —

年代

出来事

琉球王府時代
(15世紀前半から
明治11年)

- 那覇港や泊港は、对中国貿易に使用された進貢船や、薩摩への年貢の運搬などに使用された琉球船などが往来していた。
- 恩納(仲泊、前兼久の港など)、名護(名護港など)、今帰仁(運天港など)、国頭(鏡地港など)などの各村には港があつて、南部の泊・那覇港、与那原港との間で、山原船と呼ばれる小型船により物資の輸送が頻繁に行われた。
- ペリー提督は、日本開国の前線拠点としても利用し、軍港としての役割も担わされた。

近代
(明治11年から戦後)

- 明治40年改修工事、12000t級4隻が横付け可能。
- 昭和8年改修工事、20000t級3隻、45000級1隻横付け可能。
- 住民が出稼ぎとして海外や本土へ行くために港を利用するようになった。
- 第2次世界大戦前には、南の生命線として、物資の中継基地として使用された。
- 米軍に接収された那覇、泊港は米軍の大幅な改修工事により、那覇港は2万トン級、泊港は3千トン級船舶が係留可能。
- 昭和29年、那覇港の北岸が当時の琉球政府に、泊港が那覇市に返還され、それぞれ管理運営されるようになった。

復帰後から現代

- 各地の港湾は、貨物量の増大や船舶の大型化に対応するため、沖縄振興開発計画や港湾整備五ヶ年計画等に基づき鋭意整備が進められた。
- 那覇港では、新港ふ頭地区の水深13mコンテナ専用岸壁、旅客船ターミナルビルとまりん等が完成し、現在、臨港道路空港線等の整備が進められている。



現在の那覇港



昭和初期の那覇港第一棧橋



19世紀前半ごろの首里城から那覇港の風景を描いた琉球貿易図屏風

持つべき視点



海と港と街とが
一体となった
みなとまち
風景づくり



(那覇市泊)

みなとまちづくり



(那覇市泊)

● 那覇は、港町として経済の拠点となっているが、地域の人々の港に対する馴染みが薄くなっているため、そのイメージが希薄である。今後は、街の中に港が感じられる、海と港と街が一体となった風景を創出する。

地域の顔となる玄関口の整備

- 港は、船で訪れる人々が最初にその土地を目にする風景であり、地域の地形、稜線などの自然風景、三重城などの伝統的風景を踏まえ、周辺地域と調和する風景づくりに配慮する。
- 地域の自然風景や伝統的風景を活かした施設は、魅力的なウォーターフロントを創出する。
- 海は、イノー、信仰の対象となった島々など沖縄の自然、伝統を感じさせる重要な資源であることから、港の風景の重要な風景要素のひとつとして海への眺望を考慮する。
- 地域に親しまれる親水空間として、文化レクリエーション、ハーリーなど、人々の交流の場、新しい文化が生み出される場を創出する。



地域の顔となっている港(那覇市泊)



那覇軍港の中に残る御物城
(那覇市)



今に残る三重城(那覇市)



石垣島の港からは、島と島の間に見せるイノーや
種々の表情を見ることができる(石垣市)



「海の邦」に
ふさわしい
調和による
海岸風景づくり

「沖縄らしい」海岸の創出

●海岸は、可能な限りアダン等の海岸林や浜を保全する。また、構造物をつくる際には白い砂浜、岬や断崖（ハンタ）など凸凹のある海岸線との調和を重視し、ハンタなどから望む良好な自然海岸の風景を確保する。



砂山ビーチ(宮古島市)

●身近な海域は、地域のくらしと結ばれ、浜下り、ウンジャミ(海神祭)などの伝統行事などが行われてきており、海域と陸域を分断せず、人々と海岸のふれあいを妨げないようにする。
●過去の整備によって分断されたところについてはその回復を図る。



都市部と海岸地域とが分断されている(北谷町宮城海岸)



(恩納村)



(恩納村)



(本部町)

親水性の護岸や砂浜は、人々と海岸とのふれあいを保ち、親しみやすい海岸をつくる

美しい海浜の保全・復元のための協働

●沖縄の財産である海浜の保全のため、赤土流出防止や下水道などの整備を図るとともに、その維持活用に地域と協働して取り組む。

●海が生活の場であり信仰の対象となってきたことも踏まえ、海岸の清掃活動などを通じて海岸の大切さに対する理解を深める。



海岸に流出した赤土



日本初の人工海浜のビーチ(本部町海洋博記念公園)

1 沖縄を訪れる人達が
魅力を感じる風景づくり

④ 夜景の演出

沖縄らしい
夜景づくりの重要性

沖縄の夜は長い。

都市では酒場が夜遅くまで

ネオンを照らし街路灯やビル照明などが明るく、

暗い海の中に浮かぶ蛍のような、

経済活力を感じる夜の風景が見られる。

一方、農村では電照菊の照明や、

離島集落での月明かりや

星明かりに照らされる白砂の道など、

美しく幻想的な風景が今も生きている。

沖縄の魅力さをさらに高めるために、

魅力的な夜景を作り出すことは重要である。

忘れられない夜景づくりの実現に向けて、

地域の魅力を生かすライトアップづくりや、

逆に人工的な照明を抑制するなどにより、

メリハリのある取り組みにより

沖縄らしい夜の風景づくりが重要である。

沖縄の夜の風景



澄んだ空気が月を
明るく見せている
(石垣市)

沖縄のおぼろ月夜

月光、星の瞬き



天の川が夜空に
広がり、美しく
も幻想的な夜を
演出している
星空が見られる
場所は、本島や
離島を含めて少
なくなっている
(石垣市)



都市の明かり

古波蔵の高台から那覇市を見下ろした夜景
川の向こうは、豊見城市も見ることができる
(那覇市)



ナトリウムランプによって
浮かび上がった異空間(宜野湾市)



(那覇市)

本土の居酒屋は、終電時間に合
わせて11時過ぎには閉店する
が、沖縄は朝方まで開いている
ところが多い

沖縄の長い夜



(金武町)



農業の明かり

菊畑が織り成す
辺り一面に広がる
幻想風景(うるま市)

持つべき視点



沖繩らしい
美しい夜景の
演出

夜空観賞のための 光の抑制

●屋外広告物や看板類の照明を抑制したり、街路のデザインや配置を工夫することにより、月夜や星空に親しめる機会を多くする。



ライトダウンキャンペーンを実施して、
星祭りを通して町の活性化を図っている(石垣市)



大型望遠鏡で星座を観察する子供達(石垣市)



(宜野湾市普天間)



(那覇港)

オレンジ色の光が、異空間としての雰囲気を増長し、
住宅地とは異なった夜景を感じさせる

首里城のライトアップは、古都首里
が琉球王府時代の中心として栄えた
ことを偲ばせる



首里城(那覇市首里)

ライトアップの適切な実施

●ランドマークとなる構造物・建築物や水辺のライトアップなどにより、沖縄らしい夜の風景を演出する。
●ライトアップや夜景づくりにあたっては、自然環境との調和に配慮しつつ光の色を工夫して演出する。



イルミネーションの飾りで夜の賑やかさを演出するアメリカンビレッジ
(北谷町美浜)

イルミネーションによる演出

●公園、商店街、住宅など、地域が一体となってイルミネーションづくりに取り組む活動により、幻想的な風景をかもし出し、夜の風景を演出する。



夜景を
楽しむ
スポットづくり

夜景の ビューポイントづくり

●各地域の夜景のビューポイントは、観光スポットや地元の人にとっても重要なスポットであり、活用を図る。



高台から見下ろす夜景は、昼間の喧騒を忘れさせてくれる(那覇市)

ゆいレールから見た 夜景づくり

●ゆいレール沿線は市民の足や観光客の足として定着しており、ゆいレールから見る夜の風景づくりに取り組む。



ゆいレールから見る夜の風景は、新しい視点場である(那覇市)

水際に映える夜のスポットの創出

●港や都市内の河川のウォーターフロントにおける照明やライトアップにより、水際に映える夜でも安全なスポットを演出する。



ライトアップにより照らし出された泊港が水面に映え、夜の風景を演出している(那覇市)



泊港に注ぐ安里川河口にある親水公園は、美しい夜の風景を演出している(那覇市)

2 生き生きとしたくらしの中の風景づくり

① マチぢゅくい(都市)

都市に関する風景づくりの重要性

沖縄は復帰来の沖縄振興計画などに基づき、社会基盤の整備状況は大幅に改善されてきている。しかし、都市の風景に関して課題が多いのも現実である。今後は、快適で潤いの感じられる都市づくりを目指すなかで、沖縄の風土に根ざし、自然、歴史・文化と調和した「現代の沖縄風」の風景づくりにこだわっていくことが重要である。

都市・
住宅景観の
移り変わり

● 市街地は、アメリカ建築様式の輸入、台風対策などによってコンクリート建築物が風景の主体となってきた。

● 各都市とも都市施設の整備がないまま膨張し、不良住宅街、低地の浸水地域、狭小な街路、公園緑地の不足などの問題や、都市内部の過密化と周辺部のスプロール化が深刻となる

● 復帰後、沖縄振興計画のもと、急激な経済の成長とともに、全国の都市計画の方針や手法にも影響されて都市、住宅景観が変化していく。

● 高度利用による建築物の高層化とともに、商業目的による主張性の高い表現、風土とは異なる個人好みの多様な表現などにより、地域の個性や統一感の欠落した風景を生み出す。

● 繁華街をはじめ、あらゆる地域で屋外広告物の巨大化や乱立が目立ち潤いのある風景づくりと合っていない。

昭和20年	昭和45年	昭和47年	平成元年	平成15年	平成16年
終戦 沖縄の市場「マチグワ」の発生 鉄筋コンクリート造の普及 基地の町の建設 過密住宅地と狭小街路	都市計画法が制定 新都市計画法が制定	本土復帰 沖縄振興計画が始まる 区画整理事業など面的都市整備の推進 給水タンクの普及 デザインされた建物 大型マンションの増加 プレハブ住宅の導入	大型建築物の増加 大型マンションの増加 プレハブ住宅の導入 大型建築物の増加	那覇新都心開発整備事業の事業実施基本計画認可 沖縄都市モノレールの整備	景観法の施行



乱立する屋外広告物と多様な色彩、少ない緑、架線と電柱で雑然とした国際通り(那覇市)



統一感の無い風景(那覇市)



コンクリート造の建築物が主となった沖縄の都市景観(那覇市)



現在は、観光客が目立つ公設市場(那覇市)



自然風景を 保全し回復する マチぢゅくい

微地形がつくる 変化ある風景の尊重

●小さくも変化に富んだ地形形状が沖縄独特の自然風景と都市の風景の魅力を演出してきた。改変しやすい微地形の保全に配慮した都市開発や宅地整備に取り組む。

●マチなかの斜面緑地は微地形変化が生み出す都市のオアシス空間であることからその保全と回復を図る。



緑を残した末吉山と周辺の住宅地
(那覇市首里末吉町)

自然風景のスケール感を壊さない 施設デザイン

●丘陵地での宅地開発や大型建築物などの立地に際し、色彩、形態、大きさなどに配慮し、遠景として丘陵地の稜線を残すなどにより、自然風景の持つ豊かなスケール感をそのまま活かせるようにする。



稜線からはみだすことにより自然のスケール感を壊す大型建築物や石油備蓄タンク
(上：那覇市天久・下：うるま市平安座)

持つべき視点



伝統的風景や
素材・工法を
活かした
個性あふれる
マチぢゅくい



(那覇市栄町)

●市場やスーパージグワ、カー(井泉)、石畳
など、伝統的な暮らしの風景を再生、活用
することにより個性的なマチの表情を演
出する。

マチの顔となる
伝統的風景の演出



(那覇市首里金城町)

●「石の文化」と形容されるほどの石橋、
石垣、石畳道や赤瓦屋根の連続がかもし
出す沖縄ならではの家並み、シーサーや
石敢當のある街角の表情など、伝統が生
み出した技法を駆使した風景づくりが望
まれる。

伝統の技と地域の材で、
「現代の沖縄風」を創出



「現代の沖縄風」を くらしの中から 創造する ルールづくり

「那覇市タウンカラー スタンダード」

地区の性格に応じて、市全域を一般地区(住居系エリア/商業系エリア)と特別地区(景観形成地域/新都心地区/臨港地区/空港線沿線)にエリア区分し、「基調色」「補助色」「強調色」そして「屋根色」の各要素について、エリアごとに望ましいあり方を示している。

特に、都市の全体的な景観に大きな影響を及ぼす基調色と屋根色については、色の範囲を限定している。また、派手な色についても、極端な使い方を防ぐために、使用する面積の上限を設けている。

タウンカラースタンダード (色彩指針)などの活用

- 色彩は、皆が共有する景観資源の一つである。沖縄の澄んだ空と強い日差しにふさわしいタウンカラーづくりを目指して美しく快適な風景を創出する。
- 屋外広告物についても設置基準を定め、色彩指針とのバランスに配慮したデザインや色彩を誘導することにより、街並みに調和した広告物とする。

エリア別タウンカラースタンダード早見表

エリア(色調)	基調色	補助色	強調色	屋根色
一般地区(住居系)	基調色: #E67E22	補助色: #F1C40F, #2E86C1	強調色: #34495E	屋根色: #95A5A6
一般地区(商業系)	基調色: #E67E22	補助色: #F1C40F, #2E86C1	強調色: #34495E	屋根色: #95A5A6
特別地区(景観形成地域)	基調色: #E67E22	補助色: #F1C40F, #2E86C1	強調色: #34495E	屋根色: #95A5A6
特別地区(新都心地区)	基調色: #E67E22	補助色: #F1C40F, #2E86C1	強調色: #34495E	屋根色: #95A5A6
特別地区(臨港地区)	基調色: #E67E22	補助色: #F1C40F, #2E86C1	強調色: #34495E	屋根色: #95A5A6
特別地区(空港線沿線)	基調色: #E67E22	補助色: #F1C40F, #2E86C1	強調色: #34495E	屋根色: #95A5A6

※上記のカラーコードは標準的な表示です。実際のデザインには、色相・明度・彩度の調整が必要となります。

緑化の推進

●花いっぱいのまちづくりの機運を沖縄らしい風景づくりの視点と結んでいくことが重要で、緑地・緑化協定、屋上緑化など、都市部の緑化推進のための制度を積極的に活用する。



屋上緑化による都市緑化の推進(那覇市)



沖縄市は、花いっぱいコンクールを開催し、緑化推進の先進地区として取り組んでいる(写真は、沖縄市の保育園部門、通り会の部門の受賞作品)

2 生き生きとしたくらしの中の風景づくり

② シンマぢゅくい(集落・地域)

集落での風景づくりの重要性

集落に現在も残る風景は、沖縄の原風景であり、農林水産業を中心とした沖縄のくらしの中で培われてきた貴重な財産である。しかし、近年の急速な都市化とともに、本来残すべきものが多くが失われ、今や離島や本島北部地域、中南部の都市部の一部地域にその面影をわずかに残すだけである。今後は、積極的に集落や昔ながらに残る文化を保存・継承することにより、沖縄独特の伝統を絶やささない集落の風景づくりが重要である。

集落の変遷

● 琉球王府時代、伝統的集落や松並木などの沿道の風景が大きく変化した。

● 明治に入ると、瓦使用の制限が無くなり、住民にも瓦の使用が認められ、裕福な家から木造瓦葺きの家が変わっていく。

● 戦災により多くの景観資源が失われ、鉄筋コンクリート造の普及などにより、新たな風景が生み出された。

● 復帰後、本土との格差是正を目標に、社会資本の整備がなされ、都市から農村にわたり整備の充実が図られた。また、過疎化の進展、車社会進展によって農村集落が変容した。

● 伝統的風景の重要性が認識され、各地域の歴史・文化の保存、継承の動きが見られる。

1700年代 (琉球王朝)	明治11年〜戦前	戦後〜復帰前	戦後〜復帰前	復帰後〜現代
伝統的集落の風景が大きく変化した	建築制限が廃止	戦後〜復帰前 アメリカから鉄筋コンクリート造が普及 拝所のコンクリート化 海岸のモクマオウの導入	戦後〜復帰前 住宅の過密化、屋敷の細分化 ブロック塀の普及	復帰後〜現代 面的都市整備の推進 まつりの喪失 石垣の撤去 歴史のみち、樋川など 地域資源の活用整備 伝統的な集落景観の保存の動き まつりなどの復活

木造瓦葺きとブロック塀
(那覇市)



修理された仲村渠樋川(南城市)



石畳が復元された新垣集落
(中城村)



木造瓦葺き家
(うるま市)



コンクリートで作られた拝所
(与那原町)



屋敷や畑を取り囲むフクギ屋敷林
(国頭村奥)



周辺自然と
調和した
くらしに根ざす
シマぢゅくい

美しい農村や漁港の風景づくり

- さとうきび畑、花き類や夜の電照菊で見られる風景、産地栽培野菜がつくるグリーンベルト、牧場、石垣や防風林などの取り組みでつくりだす生産の営みの風景により、周辺自然と調和した美しい農村の風景を創出する。
- 農道や畑における自然素材の活用や集落抱護林の再生を行い、農村の風景に沖繩らしさ付加していく。
- 自然の景観を活かした素朴で地域らしい親水空間としての漁港の風景を保全する。



独特の風景を作り出すフクギ並木
(伊是名村)



たばこ畑が作る緑の風景(伊江村)



緑肥材として植生されているヒマワリなどが、土砂流出防止に寄与するとともに農村の風景を彩る
(伊是名村)



海岸線の侵食対策として植樹されたマングローブ遊歩道も整備され観察会等の学習の場としても利用されている (宮古島市)

自然に学び自然と調和する

●農村集落の生活基盤は、自然との好ましい関係づくりの模索からつくり出されてきて、それが伝統的な居住空間の風景に反映している。これからも、自然と先人の知恵に学びながら、自然と調和する生活基盤づくりに取り組むことが重要である。



防風林であるフクギ並木は、旅行者を異空間へ誘うとともにやすらぎを提供する空間である(本部町備瀬)



エコツーリズムでパイナップルの収穫作業を体験する小学生(東村)

文化的な
風景を
保全・継承する
シマぢゅくい

地域の尊厳を支える 集落構造への配慮

●道筋や地割、屋敷地の構成、ウタキの位置などの集落構造は、地域の成り立ちや自然環境との関係、地域の人々が誇りとしてきた文化などとの密接な関係や、地域文化としての固有の価値を持っており、これらに配慮した集落の風景を保全することが重要である。



集落の形態が碁盤状の備瀬集落(本部町備瀬)

集落に残る歴史文化 資源の保存・継承

●集落に残るウタキ、カー、石畳、屋敷林などの歴史文化資源は、沖縄らしい伝統的風景資源として保存・修復・継承していく。
●集落に残るまつりなどの文化をまつりの場とあわせて保全・継承し、伝統的風景を充実させる。



「祖神祭(ウヤガンマツリ)」大神島、島尻、狩俣の3ヶ所で行われ、昔の神々をまつる行事(宮古島市)

昔は、農耕後の沐浴や洗濯、家畜を洗うなどに利用していた(南城市大里)



持つべき視点



シマの
「沖縄風」を担う
人づくり、
しくみづくり



道路拡張事業によってフクギ並木が
保存された地域(久米島真謝)



芭蕉布の原料となる芭蕉の収穫風景
(大宜味村)

「沖縄風」の自覚に立脚
した活動育成

●地域の風景づくりには、そこで生活する人々が、その地域の土地柄や風土、生活環境を踏まえた「沖縄風」を自覚することが基本であり、まちなみの保存やまつりの継承などの活動を支えるしくみづくりが重要である。

伝統的技術の継承と
地場素材の活用

●伝統的風景を維持していくために、生活様式の変化の中で失われつつある伝統的技術を継承していく人材の育成とそれを生かすしくみが必要である。
●伝統の技術とは伝統の素材を活かす技であり、地域で産出できる瓦、石材、郷土種の草木などの素材を活用し、しくみづくりとあわせて、多面的に積極的に使用していく必要がある。

●写 真

掲載した写真の出典および提供者は、下記の通りである。
掲載の許可を快く頂いたことを、この場をお借りして、お礼申し上げる。

1 章

頁	配置	出典および提供
7頁	右	『沖縄の土木遺産』 編集:「沖縄の土木遺産」編集委員会 発行:(社)沖縄建設弘済会
32頁	上	『図説・郷土のくらしと文化』 編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版(株)

上記以外の写真提供

内閣府沖縄総合事務局、浦添市、財団法人沖縄コンベンションビューロー、社団法人沖縄建設弘済会、株式会社都市化学政策研究所、パシフィックコンサルタンツ株式会社、株式会社寛計画、株式会社データクラフト、合資会社精印堂印刷

2 章

頁	配置	出典および提供
51頁	下	『琉球弧の海底』 著者:氏家宏 発行:新星図書出版(株)
57頁	下	沖縄県もぐり養殖業振興協議会
58頁	上から2枚目	『沖縄の土木遺産』 編集:「沖縄の土木遺産」編集委員会 発行:(社)沖縄建設弘済会
66頁	下	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
67頁	上から2枚目	『沖縄の土木遺産』 編集:「沖縄の土木遺産」編集委員会 発行:(社)沖縄建設弘済会
67頁	下	滋賀大学経済学部付属資料館
68頁	下	『青い目の見た「大琉球」』
69頁	上	沖縄県立博物館
69頁	上から2枚目	沖縄公文書館
69頁	上から3枚目	『図説・沖縄の鉄道』 著者:加田芳英 発行者:宮城正勝 発行所:(有)ボーディング
69頁	上から4枚目	『よみがえる戦前の沖縄』 編者:沖縄テレビ放送株式会社 発行:有限会社沖縄出版
69頁	下	『よみがえる戦前の沖縄』 編者:沖縄テレビ放送株式会社 発行:有限会社沖縄出版
70頁	上	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
70頁	下	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
73頁	右上	『図説・郷土のくらしと文化』 編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版(株)
73頁	右中	『図説・郷土のくらしと文化』 編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版(株)
73頁	左上	『図説・郷土のくらしと文化』 編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版(株)
73頁	左下	『図説・郷土のくらしと文化』 編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版(株)
76頁	左下	沖縄県立博物館
79頁	下	うるま市立海の文化資料館
80頁	左上から3枚目	沖縄タイムス社
81頁	上	『美ぎ島の彩』 撮影:与儀一夫 発行:与儀一夫写真事務所
82頁	中下	『図説・郷土のくらしと文化』 編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版(株)
82頁	左下	『図説・郷土のくらしと文化』 編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版(株)
87頁	上	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
88頁	上	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
88頁	上から4枚目	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
88頁	下	『写真でつづる那覇戦後50年』 編集:那覇市文化局歴史資料室 発行:那覇市
89頁	右下	沖縄公文書館
90頁	右上	沖縄全日空リゾート株式会社
98頁	上から2枚目	『沖縄の土木遺産』 編集:「沖縄の土木遺産」編集委員会 発行:(社)沖縄建設弘済会
103頁	下	ファッションルームマドンナ

上記以外の写真提供

内閣府沖縄総合事務局、沖縄県、那覇市、石垣市、名護市、沖縄市、南城市、伊江村、財団法人沖縄コンベンションビューロー、財団法人海洋博覧会記念公園管理財団、社団法人沖縄建設弘済会、株式会社都市化学政策研究所、パシフィックコンサルタンツ株式会社、株式会社寛計画、株式会社データクラフト、合資会社精印堂印刷

3章

頁	配置	出典および提供
110頁	下段右2枚目	沖縄全日空リゾート株式会社
110頁	下段右4枚目	大和リゾート株式会社
110頁	下段右5枚目	株式会社ホット沖縄
111頁	上	株式会社ホット沖縄
111頁	下	株式会社クラブメッド
116頁	右	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
116頁	左2枚目	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
118頁	下	那覇市ぶんかテンプス館
122頁	右	滋賀大学経済学部付属資料館
122頁	右2枚目	『目で見える那覇浦添の100年』 監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
125頁	右下	崎山卓
128頁	左上	竹内俊人
130頁	右上	崎山卓
130頁	下	崎山卓
131頁	上	崎山卓
131頁	下	大和人もとすけ
132頁	上	崎山卓
141頁	右	宮古島総合博物館
143頁	下	『図説・郷土のくらしと文化』 編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版(株)

上記以外の写真提供

内閣府沖縄総合事務局、沖縄県、那覇市、沖縄市、石垣市、東村、大宜味村、財団法人沖縄コンベンションビューロー、社団法人沖縄建設弘済会、独立行政法人都市再生機構、株式会社国建、パシフィックコンサルタンツ株式会社、株式会社寛計画、株式会社データクラフト、合資会社精印堂印刷

●参考図書

本文の記述にあたり、下記の図書を参考にさせていただいた。

『沖縄の土木遺産』	編集:「沖縄の土木遺産」編集委員会 発行:(社)沖縄建設弘済会
『琉球弧の海底』	著者:氏家宏 発行:新星図書出版株
『図説・郷土のくらしと文化』	編集発行:仲程正吉 発行:新星図書出版株
『写真でつづる那覇戦後50年』	編集:那覇市文化局歴史資料室 発行:那覇市
『目で見える那覇浦添の100年』	監修:船越義彰 発行人:神津良子 発行所:株式会社郷土出版社
『海上の道』	編集:東京国立博物館 発行:読売新聞社
『図説・沖縄の鉄道』	著者:加田芳英 発行者:宮城正勝 発行所:(有)ボーダーインク
『よみがえる戦前の沖縄』	編者:沖縄テレビ放送株式会社 発行者:羽地智子 発行所:有限会社沖縄出版
『沖縄大百科事典』	編集:沖縄大百科事典刊行事務局 発行人:比嘉敬 発行:沖縄タイムス社
『沖縄の植物』	編集発行:仲程正吉 発行所:新星図書出版
『日本の都市環境デザイン』中国・四国・九州・沖縄編	著者:都市環境デザイン会議 発行人:馬場瑛八郎 発行所:(株)建築資料研究社
『沖縄の景観』	編著:沖縄景観研究会 発行:(社)沖縄建設弘済会
『沖縄の集落景観』	著者:坂本勢雄 発行者:緒方道彦 発行所:(財)九州大学出版会
『沖縄県景観形成推進調査報告書』平成6年3月	沖縄県企画開発部振興開発室 沖縄リゾート計画共同企業体
『沖縄県景観基礎調査報告書』平成5年3月	沖縄県企画開発部振興開発室 沖縄リゾート計画共同企業体
『沖縄県土木施設景観形成技術指針(案)』平成7年10月	沖縄県土木建築部
『沖縄県公共建築物景観形成マニュアル』平成11年3月	沖縄県土木建築部
『沖縄県観光振興基本計画』平成14年5月	沖縄県
『那覇市タウンカラスタンド』平成15年3月	那覇市都市計画部都市計画課
『沖縄有用植物資料(樹木編)』	照屋照和編
『琉球の城』著者:名嘉正八郎	発行:株式会社アドバイザー 印刷:文進印刷株式会社
『観光要覧』平成16年度版	沖縄県
『九州・沖縄の特殊土』	監修者:山内豊聡 編者:土質工学会九州支部 発行者:水波 朗 発行所:(財)九州大学出版会
『沖縄の自然一地形と地質』	編集:氏家 宏 発行:ひるぎ社
『沖縄・暮らしの大百科 観光彝祭・年中行事・風水』	監修:崎間 麗進 発行所:那覇出版社 発行人:多和田 真重 編集:那覇出版社
『やんばる国道物語』	発行:内閣府沖縄総合事務局 北部国道事務所 編集:やんばる国道変遷誌編集委員会
	製作:社団法人沖縄建設弘済会技術環境研究所
『沖縄の島じまをめぐって 増補版』平成9年11月	編著者:沖縄地学会 発行者:土井二郎 発行所:築地書館株式会社



”美ら島沖縄”風景づくりのためのガイドライン

監修 内閣府沖縄振興局

発行 内閣府沖縄総合事務局

〒900-8530 沖縄県那覇市前島2丁目21番7号 電話番号 098 (866) 0090

ホームページ <http://www.dc.ogb.go.jp/kyoku/index.htm>